271-1968・1

昭和　年　月　日第3種郵便物認可
第271号　昭和43年1月10日発行（毎月10日発行）

昭和43年（1968年）
1月号（No. 271）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

M. T. ブウリの著書……成瀬岩雄… 1
雪崩に関するシンポジウム報告…… 2
第8回登山技術講習会報告…… 7
愛知県大学山岳連盟映画会報告……19
学生部報告……19
熊本支部秋季例会報告……19
コロンビア・アンデス…静岡大学… 5
スワート・コーヒスタン
……山口大学… 6
ヘス登頂(アラスカ)……東京大学… 8
マイク・ライアンの印象…新貝　勲…20
三井松男氏文部大臣賞受賞
……望月雅郎… 9
新名誉会員・永年会員紹介…… 3
鳥海山の標高について…畠中善弥… 7
M・クルツの業績(II)……I・Y…13
冬の山（俳句）……水田健之助… 9
新旧役員交歓会…… 7
昭和42年度年次晩餐会……山崎安治…12
AACへの Message……I・Y…19
辻村伊助氏の写真について……18
谷川岳遭難発生防止について……18
外国山岳会のバッジ…… 9
会員通信及びH・ローレンツ氏より…10
図書紹介……14
山とある日・ヒマラヤ・山の時刻
踏跡(15)
会員異動(22)　新入会員(23)
会務報告(20)　訃　　報(19)
ルーム基金入金報告……18

◇マック・テオドール・ブウリの著書◇

"A Relation of a Journey to the Glaciers in the Dutchy of Savoy"

会員番号・八六五　成瀬岩雄

本書はブウリ(Mac-Théodore-Bourrit)が一七七三年に著わした"Description des Glaciers, Glaciers et Amas de Glace du Duché de Savoys"の英訳本である。ブウリについては夙に「先蹤者」の「ドゥ・ソーシュル」の章の中で述べられているので今更茲に受売りする事もないと思うが、要するにブウリと云う登山家はモン・ブランの登山史には欠く事の出来ない重要な人物なのである。初登頂の栄誉こそバカール、バルマの両者によって得られたものの、それ以前にブウリも幾度か登頂を試み、現にこのバカールと共に試みた事もあり、又、ドゥ・ソシュールの登山友達でもあったので一七八五年にはドゥ・ソシュールのモン・ブラン登山の一隊員として行を共にし、僅かな処で引返さざるを得なかった事もあったのである。

本来はジュネーブの画家であり彼の描いたものがルイ十四世、ロシヤ皇帝、サルディニア皇帝の御買上の栄に浴した程の名画家でもあった反面、登山に於ても当時としては積極的な活動家として聞こえ高く、モン・ブラン登山については特に熱烈なる願望を抱いていた実際家であり、早くよりサヴォア付近の氷河、登山、を屢々経験して居りフランシス・グリブル(Francis Gribble)の著わした名著で、今は古典の一つとなっている"The Eary Mountaineers"の中でブゥリイについては拾数頁に渉って述べられて居り、「従来、他者の様な一つの山を時々登るというのではなく毎年数多くの山を広汎に渉って登り続けたという点では最初の『登山家』といえる」と述べている位だから一七〇〇年代には当時押しも押されぬ登山家として尊敬を受けていたのである。この数々の登山によって得たものを著書にしたのがこの題のものである。

シャモニー、サーヴォアの付近の山々を歩いた紀行ではあるがこの英訳本も第三版とあるから当時は相当人気を呼んだものではないだろうか。

何しろ一七七六年の出版とあっては今から約二百年も以前のものであり試みに日本歴史の年代表を繙いて見ても我が国では江戸時代の事であり「アメリカの独立宣言」「アダム・スミスの富国論」成るとか、賀茂真淵がこの数年前に死んだ等という古い時代であるから山岳書の古典とでもいえるだろう

それだけにこの書のどの頁を開いて見ても活字が現在使っていないものが多いのに驚かざるを得ない。例えばSという活字は語尾と語の初めの時だけ使い、この両所以外のSはfの真中の横棒が右迄つらぬいていないfという字が使われている。即ち、fteep (steep), impoffible (impossible) ufelefs(useless),perfons(persons) 等の如く、僕も当初は馴れる迄、見た事もない様な単語にブッかった様な気がして苦心した事は事実なのであるが一七〇〇年頃にはこれが一般に使われていた活字らしい。アダム・スミスの「富国論」なども原書はその様なSなのだろうか。この事は何れ英文学者にでも聞いて見たいとは予々思っていたのであるが何年頃からこのfが廃止されてSを使う様になったものか……。

もう一つ、変わっている事は、各頁の一番下の行の更に一行下げた処に次頁の最初の文章が書かれてあるのは、読者の便を考えての親切心から当時一般書の習慣となっていたのだろうか……。これは予而、古い昔の本にはよく例があるとは聞いてはいたものの、僕も初めて実際に見た次第で、登山書で初めて御目に掛ったとは何んたる奇縁といわんか……。

それに御多分に洩れず扉の処には古風な蔵書票が貼られてあるが、この蔵書票の絵図も何んとか意味があるのだろうが二百年も昔のものではテンデ想像する材料も出て来ない。

何れにしても山の古典書として僕の貴重な財産なのだ。

（四二・一一・一九記）

【編者注】この原稿は、今年度のこの一本展に特別出品された成瀬氏が、出品目録・解題のために執筆されたものである。今年度は「明治百年山岳図書展」のため、出品目録のみを作ったので、ここに掲載させて貰いました。

お知らせ

婦人懇談会例会（山水会）

▽とき　一月十七日（水）18時30分
▽ところ　本会集会室
「インド・チャンバ地域について」
深田久弥氏

新年初の集会は、深田久弥氏を囲んで「インド・ヒマラヤ」のお話を聞くことにしました。
男性諸氏のご出席を歓迎します。

第二四〇回小集会

▽とき　一月二四日（水）18時30分
▽ところ　本会集会室
「一橋大学山岳会・ヒンズー・クシュ遠征報告」
隊長　山本健一郎氏

サラグラール南峰初登頂の模様と、ロシュゴル氷河周辺の登山を中心としたヒンズー・クシュ遠征のお話しをスライドを見ながら伺うことにしました。多数御来場下さい。

婦人懇談会親睦スキー山行

▽とき　二月一〇日（土）～一一日（日）
▽ところ　長野県南佐久郡稲子湯上り
徒歩一時間　しらびそ小屋
周辺（同小屋に宿泊）
▽定　員　三〇名
▽費　用　約三、〇〇〇円（交通費と宿泊費）
▽申　込　一月二〇日までに事務局へ

粉雪の北八ツ岳周辺は、スキーヤーの誰もいない穴場で、小屋の主人今井治夫氏が苦庭や天狗下まで案内してくれます。私共だけで静かなツアーを楽しむことが出来ます。男性諸氏の参加も大歓迎です。申込みは早目に。詳細は事務局または婦人懇談会委員へ。

『雪崩に関するシンポジウム』の報告

指導委員会

十月二十五日、日本体育協会々議室で開催した「雪崩に関するシンポジウム」は、出席者百二十人に及ぶ盛会で、各講師の内容に富んだ講演と質疑応答が行なわれたが、冬期登山の時期に当り、参考になるところも多いと思いますので、その抄録を載せて報告と致します。

（講師）金坂一郎氏、五百沢智也氏、堀田弥一氏、関根吉郎氏、山崎安治委員長、（司会）村木潤次郎氏。

山崎委員長挨拶

最近の日本の若い人々の登山の傾向を見ますと、岩登りなど華やかなスタンドプレーに走るように思えてなりません。本来、登山は夏冬を問わずオールラウンドのものであるべきように思います。日本の冬山は気候的にも非常に厳しいものであり、それなりに危険を伴うことが多いと思いますが、雪崩の問題一つを取り上げても関心は薄く、極端な言い方をすれば、天気図を読めれば雪崩は避けられるというような錯覚を持っている人さえあります。

古い時代には、その土地の人々の話を詳しく聴き、観天望気に努めてその難を避けるように努力したのでありますが、そのようなものだけでなく、より物理的な解明を加えてその成果を身につけなければならない筈でありません。もちろん、天気図を軽視するのでなく、正しい判断を天気図によって得るのも、重要な事柄の一つであると思います。

経験的な意味から言えば、降雪中は気温や時刻に関係なく、雪崩に会うことが多いのでありますが、ここにおられる出席者には、雪崩による事故が起らぬよう祈りたいものであります。

（講演）**五百沢智也氏**

「雪崩と地形について」

日本に於ける雪崩の体系的な研究は、まだその端緒についたばかりだとも言えますが、私共はたまたま三十八年一月の豪雪を期に、融雪洪水防止の為の積雪に関する研究を始めました。

これ迄は冠雪地域の空中写真は、実際には測量に利用できないものとされておりましたが、防衛庁の後援を得て三十八年二月から四月にかけて、空中写真による日本海側の積雪を測ることにしました。日本海側秋田から島根まで約二万枚の写真を取り、それをもとにして、視差を利用して積雪量を測り、又、部分的に雪の割れ目（特に地表の露出している部分）を測ることにより、ほぼ正確な積雪量を算出して、五万分の一地図上に等積雪深線を引き、併せて雪崩分布を観測致しました。

この三十八年一月の豪雪は、おおよそ、何処の地点でも同質の雪と考えられますので、全地域同条件という仮定の上で、雪崩の発生頻度と地形との関係を調べました。ただし、斜面の角度は五万分の一地形図の等高線を利用して算出したものでありますから、絶対的な正確さはありません。

第1表は、山岳の斜面方位と発生数について調べた結果ですが、これは当然、日照関係のみでなく、積雪量、傾斜度の違いも考慮しなければなりませんが、第二表、第三表でわかります通り、日照はやはり重要な要因の一つであり、傾斜は急斜面になる程発生率が高いわけであります。

この資料になった雪崩のうち約半数は斜面が Convex(凸)から Concave(凹)斜面へ移行する部分で発生しており、十五度程度の傾斜面で停止しております。総体的に言って、凸部から直線型に移る部分や傾斜面が極端に変化する部分において発生する雪崩が多く、連続した直線的斜面からの発生例はなかったように思います。

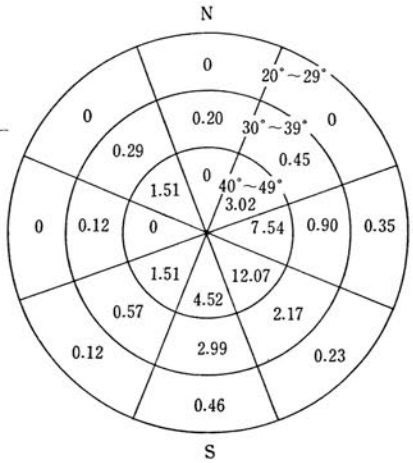
（第1表）斜面方位と雪崩数

方位	ナダレ発生数	%
S	78	36.3
SSE	63	27.9
SE	31	14.7
SW	16	7.8
NE	13	5.4
NNW	8	3.9
N	5	2.5
W	3	1.5
	217	

（第2表）発生数と傾斜との関係

斜面傾斜	件数	%	単位面積当り発生率（1.1km²）
30°～39°	187	85	0.885
40°～49°	19	9.5	3.585
20°～29°	11	5.4	0.159

（第3表）1km² 当り発生頻度



又、雪崩は二例を除いては全層雪崩であり、崩落後の斜面に縁（地表）が見られました。

現在、日本には谷川・魚沼・福井県の一部等の雪崩分布に関する資料しかありませんが、魚野川流域はこの種の写真がたくさんありますので、研究にも大部分役立つと思っております。

個人が体験する雪崩の頻度はごく少ないものでありますが、それをまとめる努力が必要だと思います。雪崩の解明は過去のデーターの集大成の上にのみ成り立つ訳ですから、登山者はその起った地点を記録し、また、地図上でそれを指摘できる程度の読図力が必要だと思います。

（講演）**金坂一郎氏**

「登山者として見た雪崩遭難について」

昨年のシンポジウムにおいては主としてアンドレ・ロックのアルパイン・ジャーナルに発表された An Approach to the Mechanism of Avalanche Release の紹介を中心に、雪崩の物理的側面を論じたので、今回は主として遭難の心理的問題について語りたいと思います。

なお今年のジャーナルには、その続編たる How to Estimate Avalanche Danger が出ているので参照されたい。なお雪崩の一般論として登山者に是非知っておいて頂きたい事柄を最近整理して、「岳人」二四二―二四三号に書いたから、これも御参照頂きたい。

雪崩による危害の受け方を例えて見ると、まむしに噛みつかれるといったケースに似ています。まむしがひそんでいる所へ行かなければ、登山者は遭難しないし、またまむしがいる所を通っても、まむしはいつも噛みついてくるわけではない。雪崩の危険地帯を通りながら、実際に雪崩に襲われる人は一部の人であるから、非常に危険ではあるが、登山者はうかつにもその恐しさを忘れやすく、雪崩に不勉強になりがちな原因が、ここにもあるように思われます。雪崩は、悪天候のように山にいる人たち全員に被害を与えないので、登山者心理の盲点に、まむしのようにひそむのではないでしょうか。

登山者の雪崩遭難の大部分は乾燥新雪によるもので、降雪中またはその翌日にやられています。その外の遭難例は雪板雪崩によるもので、これを判別するのは至難でありますが、少なくとも降雪中とその翌日に注意すれば、雪崩の遭難の大部分は避けられたはずである、ということができます。昔から降雪後二、三日は急斜面に入ってはいけないと、鉄則のようにいわれながら、相変らずこうした遭難が多い理由は何か。それは雪崩がまむしみたいなものだからです。雪が積もったばかりのとき急斜面に入って無事だった人が多いからです。こうしたとき登山者が全部遭難していれば、声を大にして忠告する必要もなく、鉄則が守られるのでしょうが、タカをくくってルール違

反をする人がやられるのです。予定ルートの積雪状態がすべて推測でき、しかも危険地帯を避ける方法を知っている人でない限り、こうした日には、絶対安全と考えられる行動だけをすべきです。

雪崩の危険を適確に判断することは極めて困難です。湿潤雪の雪崩ならば初心者でも見当をつけられますが、乾燥雪の雪崩予想は簡単ではない。スイスやアメリカあたりの組織的な積雪観測所の予報でも、統計的には適中しても、遭難を絶滅させることはできない。日本では積雪研究所はあっても、組織的に配置された観測所はないから、雪崩予報は望めません。天気予報でさえなかなか当たらない現在、雪崩の予想には極めて慎重であるべきです。雪崩の物理的研究は大いに進められなければならないが、雪崩の未知の領域はあまりにも多いのですから、予想を立てたにしても軽い意味の参考資料に留めるべきで、それにこだわって登山行動を決定したら命取りになります。天気予報の場合こういったケースが多いのですが、生かじりの知識が逆に命を縮めることになるのです。

雪崩の予備知識は、正しく使われれば、貴重な判断資料となります。しかし雪崩、ことに乾燥雪の雪崩には、例外があまりにも多いことを知らなければならない。雪崩分布図そのものは貴重な資料ではあるが、図に書かれてない場所からさかんに雪崩が出ています。その逆に、図示された場所といえども、特定の条件下に危険が生じるのであって、安全な場合も少なくありません。山村の人たちの言い伝えも、底雪崩については当たっていますが、乾燥雪の雪崩についてはあまり適確ではない場合がある。過去に遭難例のあった場所ばかりが重視されているようです。

知るということは必要です。しかし知ったということと、知識を活用するということとは別物です。雪崩の中途はんぱな知識は、もろ刃の剣となりやすい。

雪崩に関しては怪しげな伝説が多過ぎます。しかもそれは理論的な仮面をかぶって現れるから、ついまに受けてしまいやすい。まるきり迷信的な言葉ならば、ひっかかる人も少ないでしょうが、ある特定の場合には正しいことでも、一般論として通用しにくい理論がさかんに振りまわされているのです。典型的な例は、積雪表面の観察です。新雪が湿潤化するときや、点発生なだれの場合には、こうした観察は大切な判断資料になりますが、乾燥雪、ことによくしまった雪の場合には、こうした雪崩判断は行なえない。雪の中の目に見えない特定の層から雪崩が始まるからです。

「逆は必ずしも真ならず」という論理は、雪崩の場合よく無視されます。気温上昇は重大な雪崩の危険信号ですが、気温低下は積雪の安定を必ずしも意味しない。登山者がやられるのはほとんど厳寒時のなだれですが、これはいくら気温が低くとも安定しないどころか、むしろ不安定を持続させ、あるいは一層積雪を不安定化させるものです。気温が低いので油断したというのでは、言い訳にもなりません。

傾斜についても同じようなことがいえます。傾斜がきついほど雪崩が多いことは五百沢君のお話にもあった通りです。しかし傾斜がゆるいほど雪崩に対して安全かいうと、そうでない場合がある。例えば三十度くらいの斜面は雪崩が少ないのは事実ですが、緩斜面から雪崩が出るためには、異常に大量の雪が積もる必要があり、ひとたびこうして発生した雪崩は、異常に大規模のものになりやすい。意外な場所から出る雪崩は大規模なものになりやすい、というのはこうした理由によるのです。登山者は百年に一回しか現れないような雪崩でも避けなければならない。そのためにはこうした種類の雪崩に対しても気を配る必要があります。

雪板雪崩の遭難は、まさかと思うような意外な所でおこりやすいが、乾燥新雪の雪崩の場合には、多くの人が、雪崩が出るかも知れないといった、いやな予感を報告しております。降雪の翌日の遭難は、ほとんどが登山者自身が人為的に不安定な吹きだまりを刺激して出た雪崩にやられていますが、こうしたいやな予感がしているのに、登山者は奇妙にも、上へ上へと突っこんで行って遭難しております。あと数メートルも登れば平らな安全地帯に達するという距離にまどわされて、一番危険な所に入って行く。飛んで火に入る夏の虫と同じです。雪崩に関して谷底は恐しい場所だという印象があるのでしょう。下降して退却すれば人為発生の雪崩は出ようはずがないのに、本能的な恐怖感から、逆に最悪の場所に突入しているのです。これは必ずしも本能的に動いたためだけの遭難ばかりではありますまい。例えば強気がわざわいして、まだ何事もおこっていないのに退却したら臆病といわれはしまいかという自信喪失。あるいは気温上昇や日射の現われる前に稜線に急ぐ湿潤雪崩対策との混同もあろうかと考えます。

雪崩の物理的性質そのものが複雑な上に、登山者側の心理的状態も右に述べたように、極めて不安定に陥りやすく、雪崩予防の難しさを痛感させられます。ことに遭難の救援の場合などには、救援するためには急ぐということが絶対に必要なため、冷静な判断が失われがちで、二重遭難が雪崩の場合に圧倒的に多い原因となっています。

知ること、調べることはもとより大切ですが、これだけでは雪崩の遭難は防げないこと、以上により理解して頂けたと思いますが、遭難予防の第一は、遭難は決しておこすまいという心構えと、勇気をもってその信念にもとづいた行動を実行することにあります。そのように行動できる人は、知識が不十分な時代に、十分余裕ある行動によって成果を挙げて来たこと、登山史の示す通りです。

堀田弥一氏

「体験的立場から」

私は既に年をとってしまって、今ではなかなか山登りも難しいことになりましたが、古い体験をお話しして何かお役に立ちたいと思います。

私の学生時代は、今いうバリエーションルートを取って登ることが多くして、私自身は黒部川の流域の山々へ、黒部の谷から登ることが多かったので、言ってみれば、私の登山体験は総て雪崩と結びついたものだとも言えます。

私は、山登りに遭難があってはならないと思いますし、どんな雪崩の多い所でも、これは一つ一つ避けなければなりません。

私の雪崩の知識は、大島亮吉さんの書物によるものだけでありますが、雪崩の探索というものは非常に難しいものであるけれども、実際によく観察してから読んだものに当てはめると、はっきり理解できるものであります。

人間も生きておりますが、雪崩も動いているものであります。方位・温度変化・風や長期の気象状況によって、それは刻々変化して行くものでありますから、極端に言えば、温度が一度違っただけで雪崩を受けるかうけないかのわかれになるとも言えるわけであります。

本当の雪崩に対しての登山者としての知識は、やはり実際に経験してみなければわからない。しかし、ぶつかっては何にもなりません。山から落ちる雪崩の観察、又、デブリの観察など、雪崩の現場を見る機会がある限り、これを観察しようとするしっかりした心構えが必要であります。

雪崩は、必ずそれを避けようという対策なくして、それに向っていくのは危険きわまりないことです。昔の私の登山でも、雪崩の多い所を登る時は、時間的に十分余裕をもって登りましたし、また体力的にも安全圏を大きく取ったものですが、今の遭難に同種類の雪崩によるものが多いのは非常に残念でなりません。たとえ、雪崩に対する十分の知識をもっていても、何処かに心のゆるみがあると言えないでしょうか。

雪崩の危険地帯に入ったら、全神経を集中して、どんな時にも事故に対処できる身構えをする。もし、万が一流されそうになったら近くの立木に飛びつくような敏捷さや直観力も大切だと思います。

冬山は、先ず安全で自信のある処から始める。そして、入山したならば常に辺りの状況に注意を働かせる。そういう、基本的な事柄にもっと力を入れてもらいたいと思う次第です。

関根吉郎氏

「科学者の立場からみて」

科学的な立場から見れば、「水」というものは非常に研究しにくいものでありますが、その水の一変型である雪がなだれる。雪崩といっても、規模の大小から種類の甲乙やら、学問的に把握することは全く難しいもので、これを分類したり研究するということは不可能だとも言えると思います。もちろん、その対象となる雪崩の極限を知るということは大切でありますが、その

（次頁下段へ）

『新名誉会員紹介』

今年度の名誉会員推薦は、十一月二日開催の理事、評議員会において、次の三氏が推薦され、「名誉会員推薦等に関する内規」にもとずき、十二月一日開催の年次晩餐会の席上、松方会長より発表された。

当日は松本善二氏は81歳という高令にもかかわらず、若々しいお姿をみせて下さり、出席者一同より拍手を以て迎えられたが、岡埜徳之助、牧野平五郎両先輩は、残念乍ら出席できませんでしたので、両先輩より松方会長に宛てた書簡を被露させていただくことにします。

× × ×

拝復、過分の待遇を蒙り、誠に恐縮仕ります。本来ならば拝眉の上、御挨拶申上ぐべき処ですが、老歩不安のため遺憾ながら、書中を以て御礼申上げます。

十一月十七日　岡埜徳之助

松方三郎様

拝復　此の度役員に於かれては、何等のお世話も申上げぬ小生を名誉会員に推挙に預り洵に恐縮に存します。皆様の御好意に対し、御礼を申し上げ、御受け致しますと共に、今後とも会のため努力いたしたいと存じます。尚、十二月一日の年次晩餐会には出席致すべき筈でございますが、前便にて御案内申上げました通り、当日差支えがありますので、欠席いたしますので御了承下さいませ。御列席会員方々によろしく申上げて下さる様御願い申上げます。

十一月二十日　牧野平五郎

松方三郎様

× × ×

以下に新名誉会員の略歴と、その主な登山歴を紹介致します。

二〇六　牧野平五郎氏（林並木氏の紹介により入会）

明治十九年四月二十三日富山市初音町に生れる（81歳）。早大商科中退、富山鉄道取締役、富南鉄道常務、富山電気鉄道副支配人、監査役等を歴任。昭和二十九年～三十五年富山県公安委員会委員長、昭和三十五年十月富山市監査役に就任。

・主なる山歴

明治45年、越中山岳会を創立し理事長となる。越中、飛騨、信越方面の山に登る。その後、本会富山支部長、富山県山岳連盟会長等を歴任。現在は顧問。又昭和37年に富山県自然保護協会を設立し、現在その会長として北アルプスの自然保護運動に尽力されている。

二七一　岡埜徳之助氏（一九一一年九月入会）

明治十八年十一月二十日、現在の台東区に生れる（82歳）。昭和十八年八月廃業するまで、嘉永元年十月創業の菓子舗を経営。

・主なる山歴

明治36年頃、富士山に六回登り、明治43年木曾御岳、大正初期、冠氏と、甲武信、破風、木賊、雁坂の縦走等を行なった。その後老母の意志にて、山行を断念されたが、本会にはその後、ずっと在籍し、小集会等で山行の話をきくことを楽しみにしておられた。今回のルーム基金募集に当っても、卒先して大口の募金に応ぜられ、係のものを感激させた。

四五九　松本善二氏（一九一六年四月入会）

明治十九年十月四日、東京に生れる（81歳）。東京史学会の会長、大和文化会理事等も歴任。丹沢山塊の初縦走。谷川連峰の初縦走等の記録があり、古くは、木暮理太郎、武田久吉氏等と度々山行を共にしている。最近も、全国各地の名山をこつこつとよく歩かれている。昭和六年～八年、本会の理事として会務に尽くされている。

・山歴、山岳への寄稿等については、「山」二五九号十四頁の永年会員紹介の項を参照して下さい。（以上）

＝新永年会員紹介＝

本年を以て、本会在籍五十年に達した左記三氏は、十二月一日、プリムラで開催された年次晩餐会の席上、永年会員として表彰され、永年会員章が贈呈されました。

当日、又木周夫氏は、残念乍ら出席いただけませんでしたが、伊藤氏は元気な姿をみせて下さり、松方会長と共に、出席者全員より拍手をもって迎えられました。以下に新永年会員三氏の経歴をレジスター資料をもとに紹介致したいと存じます。

五四二　伊藤英三郎氏（一九一七年七月入会）明治二十二年十月十五日、兵庫県印南郡今市村に生れる（現在の高砂市伊保町今市）。東大英法科、ハーバード大学大学院卒。日本銀行松本支店勤務の大正元年頃、信濃山岳会設立に関与、同十二年頃、日本銀行山岳部を設立する。

・主な山歴

明治35年の富士山にはじまり、明治～大正の初期にかけ、関西、九州、関東の山を登る。大正六～七年頃、松本支店に勤務していたので、北アルプスを広範囲に亘り歩く。大正10～12年頃、在米中、アパラチアン・マウンテン・クラブを時々訪問、マウント・レニア、ロングス・ピーク等を登る。レニア山では、下降に最短時間のレコードを作り、サーティフィケートをもらっている。日銀時代は藤島敏男氏の先輩であった。

五四七　松方三郎氏（一九一七年七月入会）、松方会長については、今更説明するまでもないので省略する。

五八六　又木周夫氏（一九一七年十二月入会）明治二十七年一月十六日鹿児島に生れる。東大法科卒業後、住友合資会社に入社、新高製糖、日本自動車、日本内燃機ＫＫ等の役員を歴任。現在熱海市にて弁護士を開業している。

・主なる山歴

大正二年頃旧制一高山岳部、旅行部に所属し、北アルプスに登山して以来、南北アルプスその他に登る。一高時代からの同級生であった日高信六郎氏に指導された由である。

・「山岳」への寄稿

三ツ峠山の記事がある。（Ｙ・Ｍ）

名誉会員　中村清太郎氏逝く

かねて病気療養中の本会名誉会員中村清太郎氏（会員番号一五三番）は、十二月二十日朝阿佐ケ谷の自邸において永眠された。享年七十九歳。中村氏は一昨年の静岡支部主催の紅葉会に参加された直後に転倒され、右腕を骨折し、そのため好きな絵を描くこともならず晩年はまことにお気の毒であった由である。本会はここに衷心より哀悼の意を表するものである。告別式は二十一日午後自邸において行なわれ、会より霊前に生花を捧げ、松方会長、武田、槙、藤島、神谷各名誉会員、辰沼常務理事、野口末延、岡一次、岡茂雄の各氏が参列し弔意を表した。

（御遺族―杉並区阿佐ケ谷北二ノ三二ノ一二　中村浩太郎）

（前頁下段より）

一つ一つの雪崩は、厳密に言って総て新しいものであります。だからといって、新しい雪崩の型だから、これは不可抗力だなどという言い訳にされては困る。逆説的に言えば、遭難の責任のがれの為の雪崩の研究ならば止めて欲しいということです。

アンケートなどによっても、雪崩に捲きこまれる直前に、雪崩の発生する予感がしたと言う人がいるのだが、実際は、そんな予感は何にもしなかったのじゃないかと私はいいたい。もし、したのなら、そのまま下山するのが当然なのだから、事故は起こる筈がないと言えましょう。

災難は忘れた頃にやってくるといいますから、騒いでいる間は多分ないと思います。学問としての雪崩研究はともかく、登山者としては大いに騒いで欲しいと思っております。（以上）

――・――・――

以上、質疑に対する講師の意見も内容に含めたつもりでおりますが、話し言葉を書き改めた為、言葉上の微妙なニュアンスをお伝えできぬ個所もある点、御容謝願います。当日の記録は学生部の平田靖彦・水島顕彦両君にお願いしました。（文責・松永敏郎）

紫綬褒章の受章

本会元信濃支部長の尾崎喜八氏（会員番号一四一九番）は、この度、多年に亘る「詩」を通じての文化に対する功績に対し、紫綬褒章受章の栄に浴した。

〝もう一つのエベレスト本〟

CLIMBING EVEREST-An Anthology selected and edited by Geoffrey Broughton, from the writings of the climbers themselves. Oxford University Press, London, 1960, repinted 1963.

アンデスの記録（1967）—III ★

コロンビア・アンデス

静岡大学学術調査隊

La Expedicion Cientifica los Andes Colombianos de la Universidad de Shizuoka, Japón.

【編者注・アンデスのこの部分へ登山と学術調査を目的として入ったのは、日本として静岡大学隊が最初であると思う。この意味でも貴重な記録となっているが、その他に、多面に亘る豊富な学問上の資料を齎らして帰国されたことは他の遠征隊のもって範とすべきものと考えられる。

尚、この付近の登山記録の主なものとしては、後出のもの以外にも、今、米国ネバダ大学で外国文学の研究、指導をしているチリー人のE・エシュバリーアの書いたものがあるので参照せられたい。"The Santa Marta Range, Colombia",-AJ. LXIII, Nov. 1958, Evelio Echevarria, C.

これにはサンタ・マルタ山群の地形概要、探検抄史、参考資料まで一応紹介されているので非常に便利である。】

◇　◇　◇

拝啓　秋冷の候いかが御過しでございますか。過日は隊長宛てお手紙を頂きまして恐縮に存じております。

扨て、私共一行八名のうち第二次帰国の六名が去る一〇月一一日横浜着の商船三井のアルゼンチナ丸で帰国致しました。

九月上旬コロンビア共和国内で帰国準備中の際、自動車事故に遭い隊員五名が怪我をするという一幕もありましたが、幸い大事に至らずに済みました。「山岳」の原稿を用意する準備を始めておりますが、取敢えず我々の隊の行動と成果の概要につきお知らせ致したいと思います。（山本良三）

◇　◇　◇

隊員名（再掲、会報二六三号参照）

土隆一（隊長38、静大理学部助教授、理博）

山本良三（副隊長、27）

高橋真弓（33）、杉本　武（27）、

和田　亨（23）、太田欽也（31）、

安藤　弘（38）、

小久江浅二（38、大宮日赤病院内科部長、医博）

成果概要

一、学術調査

昆虫、五〇〇〇点（主に蝶と蛾）

貝類、一〇〇〇〇点（主にカリブ海にて）

化石、若干（カリブ海沿岸）

植物、約三〇Kg（シダ類、カヤデ類、藻草）

岩石、約八〇Kg（地質図作成に役立つ）

二、登山

Pico Bolivar(5775m)…北東稜より登頂、新ルートか？（編者注・この高さを5773mとする説あり）

Pico Cristobal Colon(5775m)…登頂。

Pico Simons(5660m)…南稜より登頂、第3登、新ルートか。

Pico La Reina (5535m)…登頂、第7登。

Pico El Profesor(5320m)…第2登

Pico Nueva Vista(5180m)…〃

Pico Nieve de Naboba (5260m)…第2登。

初登頂

Pico Santander(5540m, 仮名)

5430m…初登？

5360…初登？

5200m, 5180m, 5175m（3峰とも Nevado Tesoro と仮命）

北西の無名ピーク群（Pico Shizuoka と仮命）

4980m, 4970m, 4940m, 4920m

4895m, 4875m, 4880m, 4880m

5000m, 5030m, 5090m(初登？)

4890m（Pico Esmeralda と仮命）, 4920m, 4980m。

※1965年、米国 Pittsburg探検会が初登頂した Pico Nieve de Naboba, Pico El Profesor, Pico Nueva Vista では山頂で米国隊の書き置きを発見いたしました。（Appalachia, Dec. 1965）

（以上）

追って登山活動前後の行動は次の通りです。

（6・10）全員 Barranquilla に集合

（6・23）バランキリヤ発、三台の車でサンタ、マルタ山群に向う。

（7・1）ブレ・BCに到着、以後、登山活動に入る。

（8・4）P・BC撤収、帰路につく

（8・9）バランキリヤ集結。

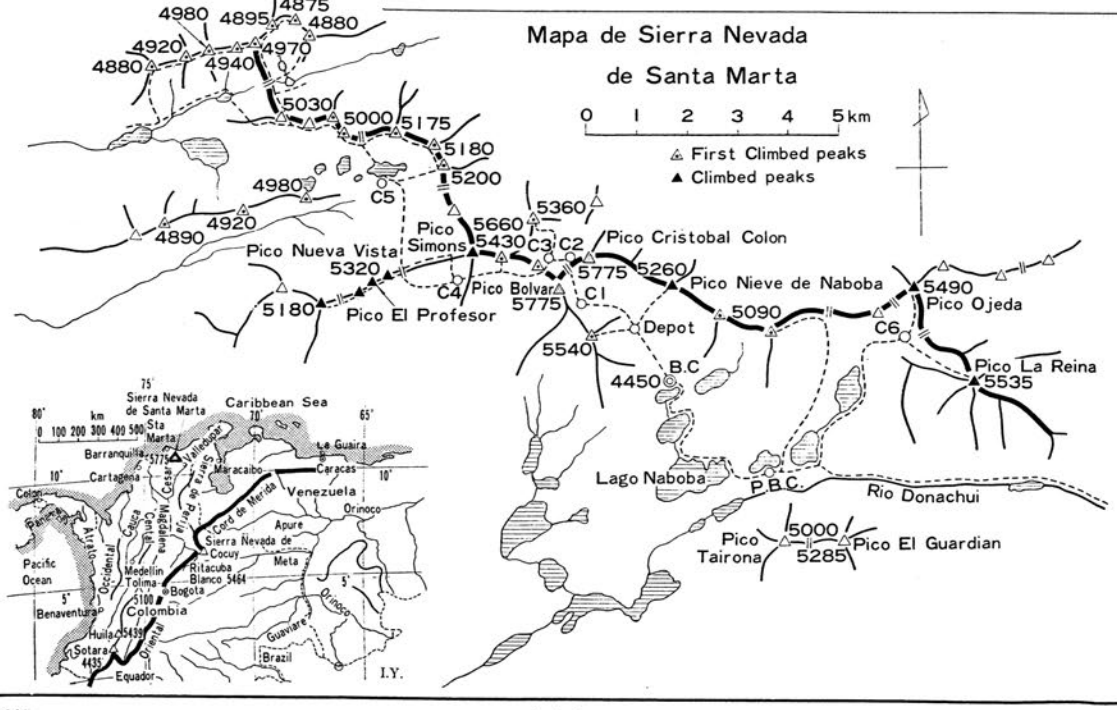
（8・10～21）Caribbean Sea 沿岸で貝と化石の蒐集、断層の調査。

（9・8）自動車事故発生。

（9・12）Cartagena より全員乗船。

（10・11）横浜着。（以上）

7000m の上空より見たサンタ・マルタの主峰



—Swat-Kohistan—
"FALAK SAR" の登頂と Par(Miangul Sar?) の偵察

山口大学隊
—一九六七—

一九六七年には偶然にもスワートに日本から二隊出かけ、隣り合せの地域で各々活動して来た。資料を頂いた順序に従い、まず山口大学隊の方から先に御紹介する。

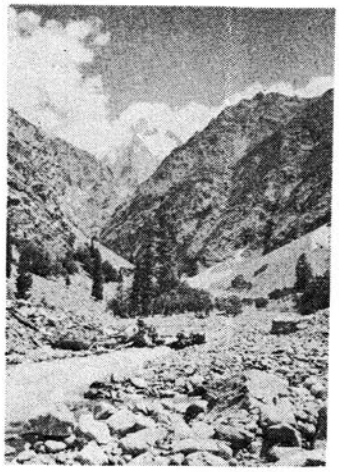
（8月12日）ベシャワールから車で。スワートの首府サイド・シャリフに向う。タクシー代一四〇RS。四時間。

キングズ・オフィスに行き、ファラク・サールに向うことを告げる。チトラル越えは不許可。

（8月13日）マチルタンまで車代一五〇RS。三時間。

（8月14日）担夫四名、ポリス二名と共に出発。自動車の通れる道。途中数十人が道路工事をしていた。一年後にはマホダン湖まで車が入れると思う。担夫は二時間もすると アゴを出し、休む時間が多くなる。午後二時、ファラク・サール（以下FSと略す）谷の少し手前で設営。

（8月15日）谷に入って一時間もすると眼前にFSが顔を出した。二八〇〇m地点に放牧民の家がある。ここからのFSの眺めは素晴しい。二時間で森林限界。三三〇〇m地点で谷二分、BH設営。右側から滝、この沢を三〇〇m登ってみたが、FSの西稜へは取りつけそうもない。BHからは本峰は見えない。



ファラック・サールの西面　雪の多い左の稜線がルート（2800m 地点より）

（8月16日）担夫と二人で左の本流をつめる。三九〇〇mの氷河の末端から右に廻り込み、四一五〇m地点にデポをする。ここも手前にピークがあるため本峰は見えない。ティリチ・ミールらしき七〇〇〇m峰を望む。

（8月17日）四三〇〇m地点にBC建設。他の登山隊使用の跡あり。

（8月18日）快晴。大きく左に廻り込み雪原を通り、小さな尾根に出る。四六〇〇m付近まで登って本峰を望む。

北稜は短いが急な傾斜で落ち込み、ここで二つの尾根に分れている。左の尾根は小さいがなだらかなので、可能性は充分にある。右の尾根は今われわれの立っている小さな尾根をつめれば到達出来るが、稜線に出る最後の地点が悪そうである。われわれはそこで左方の尾根（眼前に見えるもの）をルートとすることに決めた。二人とも頭痛と扁桃腺に悩む。

（8月19日）BCから大きく左に廻り込み（注・二人は、大きく廻り込むことが好きらしい?）、昨日決めた尾根に取りつく。岩場はないが、傾斜は思ったよりきつかった。途中で外国隊の旗を発見する。四九〇〇m地点に快適なビバーク地点があり、遂誘惑される。ドイツ隊のACが五一〇〇mなので少し心配である。

ここからは北稜がよく見える。頂上に大きな雪庇、北壁からは雪崩が絶えない。しかしそれらはわれわれのいる尾根の真下の大きな氷河のなかに消える。夜は満月が本峰の左にあがり、テントの中までその光が入り込む。

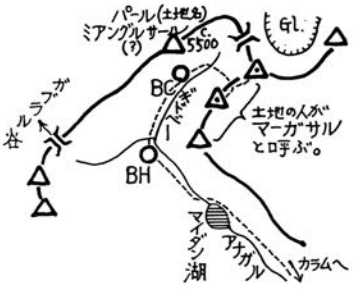
（8月20日）五時半出発。曇っているが視界は充分。六時半、ドイツ隊のAC地点に達する。大きなクレバスを右にトラバースし乗り越えると、赤茶けた岩峰（二つの尾根の出合う地点）に出る。

岩がもろいので両側をカッティングしながら廻り込む。八時、頂上からのダイレクト尾根のコルに出る。コルから見る北稜は短かく感じる。傾斜もそうひどいとは思えない。天候は次第に崩れ、ガスがひどくなる——五三〇〇m位。われわれは頂上近くに見える黒い岩を目標に進む。

ACからの頂上

北壁側（東側）に大きく雪庇が出ている。登るにつれて傾斜はきつくなる。途中大きなクレバスが二つあった。リッジの左は雪庇であり、その下は何百mも垂直に落ち込んでいる。右は斜面はズタズタに切れ、ルートはない。われわれは雪庇近くをルートに選んだ。目標の黒い岩付近は特に急斜面であり、最後の壁をガムシャラに乗り越すと、数十m先に小さいふくらみがあるだけであった。

頂上はニュー・ジーランド隊が言ったように広くはないが、その半分位はあった。右に小さな岩がもりあがり、ケルンらしきものがある。そこに大きな雪庇が出ていた。



頂上には三〇分位いて晴れるのを待っていたがダメだった。むしろ悪くなるばかりであった。苦しい下降を終えて、六時にテントに戻った。

× × ×

登頂した時、ガスっていたので残念いやくやしくてたまらなかった。その上、用意してきた赤外線フィルムも、二人のカメラのフィルムが残っていたので持っていかなかった。

頂上に着いた時、ドイツ隊の記録と少し違うと思い周囲を回ってみたが、鋭く落ち込んでいて、下ってみる気がしなかった。雪庇が大きく発達しているところをみると、年によって頂上付近は変るのではないかと思う。途中のルートは、ドイツ隊と同じらしい。

（8月21日）一時発、BC三時。

（8月22日）一一時半発、BH三時一五分。

（8月23日）一〇時発、FS谷出合二時、担夫三人。

（8月24日）八時四五分発、マチルタン四時。

（8月25日）九時発、一時カラーム。

（8月26日）八時一〇分発、アナガル谷の二七〇〇m地点四時。

（8月27日）八時発、アナガル谷の三〇〇〇m地点にBHを作る、二時。

（8月28日）九時発、担夫は帰えす。

（8月29日）一〇時二〇分発。岩の下にシェルトをかけBHを作る。三六〇〇m、一時半。

（8月30日）八時発、一〇時一五分（三七七〇m）、一一時発、〇時半（四六〇〇m）、二時発、小ピーク二時半—三時。四時BCに戻る。

（8月31日）一〇時四五分発、〇時半BH。

（9月1日）九時発、七時カラーム。（一一時五〇分）

隊員名

長広善行（23）、秋山利之（22）

◇新旧役員交歓会◇

今年の新旧役員交歓会は、ルーム移転等のために大変に延引し、時期を失していたが、この度前理事の川崎巌氏が十一月二十五日に、南極越冬隊員として出発されることになったので、この機会に本会会員で南極隊に参加される村山隊長、石川隊員の歓送もかね、又前回の新旧役員交歓会に南極越冬中のため出席できなかった前越冬隊長、武藤晃氏をも招いて、十一月二十一日午後六時三十分より、上野山下の蓬来閣において交歓会を開催した。

席上松方会長より退任された役員・評議員に記念の特別製ネクタイ・ピン（山口理事、村井評議員にはブローチ）が贈られた。

又、松方会長からは、この機会に紹介しておきたいと前おきされ、秩父宮記念学術振興会が財団法人となり、本会にも選衡委員の推薦方依頼を受けたので、会長である自分と槙有恒氏を推薦しておいた。十二月中旬に秩父宮記念学術賞受賞者の選衡があるので、登山界からも候補者があれば推薦致し度いとの説明があった。

最後に村山隊長より、南極出発に当っての抱負が述べられ、来年六月第一週又は二週に、東京で国際南極会議（テーマは設営）が開催されるが、英国のフックス隊長と共にニュージーランドのヒラリーも参加することになっている（朝日新聞の招待）ので、JACとして歓迎会を開いて欲しいとの希望がのべられ、閉会したが、まことに楽しい一夕であった。

〔出席者〕

松方三郎、三田幸夫、渡辺公平、吉沢一郎、藤井運平、佐藤久一朗、折井健一、島田巽、望月達夫、津田周二、川森左智子、牧野衛、加藤泰安、辰沼広吉、大塚博美、松田雄一、飯野亨、宮下秀樹、丹部節雄、野田三郎、酒井敏明、武藤晃

退任役員――川崎巌、村木潤次郎、野口末延、村井米子

南極隊員――村山雅美、石川正弘

以上28名

【第八回】登山技術講習会報告

指導委員会

例年行なわれて来た東京支部主催の登山技術講習会は、支部の解散に伴って、新たに指導委員会が担当することになった。

これは、これから冬山登山をやろうとする初中級の若い人達に、基礎的な雪上技術を覚えて欲しいという考えから生まれたもので、あわせてまた、講師と受講者が山で一緒に生活することを通して、新しい交流や親睦を計ることもその目的の一つになっている。

講習会の開催に先だって、十一月十七日、打合わせ会をかねて三講師によるレクチャーが行われた。山崎安治氏「富士登山史」は、信仰の対象としての富士山から、登山を目的としたそれに移り、さらに、氷雪技術の訓練の場として近年多数の登山者を迎える富士山の歴史を説き、金坂一郎氏「冬の登山について」は、冬期登山入門の心構えや注意を述べ、地味な山行の積み重ねが、結局、冬山の知識や登山技術を身につける最も確実な道であることを強調した。

長尾悌夫氏「凍傷と凍死について」は、この両者が全く違ったものであることを例をひいて説明し、予防・治療の正しい方法を分り易く述べて終った。

十一月二十三日朝、日本山岳会ルーム前に集合、貸切バスに全員乗車。出発八時ちょうど。

富士山五合目の御庭小屋下に到着したのは午後一時過ぎ、中腹から山頂にかけて雪の余りに少いのに一驚した。

十二月二十四日、快晴、五時起床。七時出発。全員、御庭から旧精進口を経て青滑沢上部六合五勺付近まで登る。トレーニングの場所を探し廻らねばならない程の積雪状態であったが、午前中は雪上歩行と滑落停止を、午後はザイルを使用しての確保の技術等、芳野講師のユーモアを混えた懇切な指導の後、各パーティーに分れてそれぞれの講師がぴったりついての実技指導で期待以上の効果を挙げ得たと思われる。

翌二十五日、昨日の実技練習の結果、あらためて編成されたパーティー毎に、二十一名の受講生が各講師リーダーのもとに、吉田口から山頂に向かった。残存の十四名は二名の休養者を除いて再び技術の練習に一日を費した。

この日は、山頂近くの風がやや強かったものの、一望のもと、南アルプス八ヶ岳はもとより、遠く北アルプスの白雪の連嶺もくっきりと青空に映える快晴に恵まれ、それぞれ山の一日を十分に堪能することができた。

二十六日　晴。八時より反省会を行う。

受講生諸君の感想は、充実した技術練習に満足であったし、また、始めて冬富士の山頂を踏んだ喜びを述べている上に、望めるならば、講習期間をもう一日・二日延ばして欲しいということであった。今回の食事は、小屋で用意してくれた水が、容器の影響で悪臭を持っていたのが非常に残念だったが、献立も大変好評を得ることができた。

講師側からは、この講習会によって得た技術は、その全体から見れば誠に小範囲であり、これを機会に地道な努力を積んで自分の山をつくるようにして欲しいという山崎リーダーの話や、講習会に於いてなお教えることのできぬ、山の持つ多くの危険に対して備える力を養うことが最も大切な事柄であるという村木講師の話など、それぞれに受講生に対して適切な助言や要望があった。

わずか四日間の講習会ではあったが、御多忙の折にも関らず講師として御参加いただきました方々、また、食料の買出しや梱包に御協力願った方々にお礼を申し上げ、講習会の無事終了を御報告致します。

（文責　松永敏郎）

◎講師　山崎安治（チーフリーダー）小味秀純（マネージャー）岡部紀正（ドクター）、牧之内昭武・広谷光一郎・村木潤次郎・広谷精啓・吉田広明・上田亮吉・原　博貞・三辺夏雄・錦織英夫・芳野赳夫・小方全弘・松永敏郎

◎講習生、山口節子・梅野淑子、川井千翠子・佐藤京子・武田満子、斉藤桂・渡辺節子・菅原智子・冨田美知子・斉藤麗子・佐藤多美子・入沢崇男・野邑正夫・竹内　仁・亀井　公・竹内誠吉・佐久間壮助・大塚正彦・小早川宏・山田和男・橋本利幸・石川　徹・鈴木　宏・斉藤　満・都筑　竜・金森憲紀・橋本保男・逆井二郎・古沢利英・和田幸男、松原善志・松井　豊・岩岡克郎・水野　晃・佐藤兼治　（以上）

『鳥海山の標高について』

畠中善彌

鳥海山の高さは以前七高山の一等三角点の高さ即ち二二一九・九米の標高になっていたのであったが後に安斉徹氏（当時山高教授）により現地測量が行なわれ実測の結果新山が頂上で二二三七・四米の標高が確認され、爾来今日に至っている。

所で安斉先生の新山々頂部は現在石祠のある標高柱のある所であるがその筒所を是としていたのであるが疑問とされる点もあったので、今秋一寸した測量器を借りる事が出来たので十月十日登山し実測した結果現頂部と北部のつきやまとは全く同一標高なる事が確認されるに至った。

是によって鳥海山の標高は従来と聊さかも異にしていないが、新潟地震前までは確かにつきやまの方が若干高かった事となり、鳥海山の高さが日の目を見ずに消滅した事にもなるのである。

（会員・二一〇二）

向って北にある岩峯（つきやまという）が高いのではないかと取沙汰されていたのであったが、昭和三十九年六月の新潟地震で新山も到る所崩岩し、つきやまも上部二米余崩壊するに至った。

然し乍ら最高部としての箇所は依然現在の石祠部とつきやまの何れが正しいかについては二論があった。現に秋田県側のパンフレットにはつきやまの写真を掲げ二二四〇米の標高となっているものも見受けられる。

私も夫等については安斉先生の実測

"Tiquimani," by Margaret Griffin, Kosmo Publishers Pty Ltd., Stellenbosch, 1965.

ワイナ・ポトシの北東々40Kmにあるティキマニ峰（五六〇八m）はレアル山群でも最も難しい山の一つである。

E・エシュバリアから送ってくれたものだが、写真は綺麗だが、中味は面白くない本だという。南ア連邦の登山家によって登られた。（吉沢）

1967 東京大学アラスカ遠征隊

――ヘス峰登頂とエクルートナ氷河の遭難――

新聞抜萃 東大より

本隊の目的は、アラスカ山脈及びチュガチ山群の登頂と偵察。付近の夜光観測、地質調査、高所医学の測定で、これらの一部はアラスカ大学の協力のもとに行なわれた。また、往復の船上では、夜光の緯度効果測定と海洋プランクトンの採集も行なった。

第一目標のヘス山登頂については、飛行基地グルカーナを拠点にセスナ機で6月18日に全員ウエストフォーク氷河に入り1860mの地点にベースを設けた。目指すヘス山は見えないが、急峻なデボラの東稜、南東稜が眼前に、東には第二目標のヘイズ山が望まれ絶好の場所である。

日中はしきりに雪崩が起り危険なので、白夜を利用し、昼間ねて雪の安定する夜に行動した。

6月19日。登路偵察の結果 ①ウエストフォーク奥氷河→デボラ・ヘスの鞍部→稜線→頂上。②ヘス南峯II→雪田→頂上の二つのルートが考えられた。①は一九六四年にハーバード大学が登頂したことが判明したので、②をとろうとしたが、偵察の結果、このルートは岩が極めてもろい上、セラックスが大規模で日数からみてルート工作が不可能と判断し、本隊は①による登頂を行い、別に1日か2日のビバークで小隊が②のラッシュ攻撃を行ない、この隊は西峯付近で本隊が収容することに内定した。

6月21日より活動開始。ヒドンクレバスを避けて奥氷河に達し、第一キャンプを建設。続いて平均40度の急斜面を登り、最後に急な氷壁を越え、デボラ、ヘスの稜線上、3150mの地点にC2を作った。

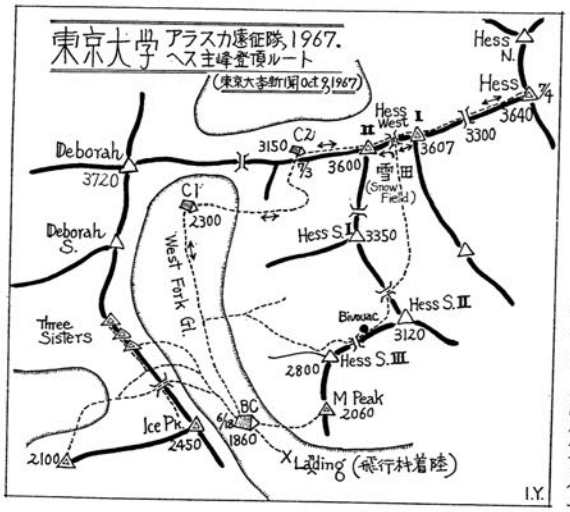
7月4日。前日の早朝にC2に入ったルート工作隊松田、本儀の2名は朝9時50分にテントを出発。14時間にわたる苦闘の末、23時45分ヘス山の頂上に辿りついた。

一方、稲垣・伝田は7月5日、②のルートからヘスに向う初トレースを試みる目的でC1を出発。雪の状態が悪く途中でビバーク。雪田の中もクレバスが縦横に走り、ルートの選択に苦労し、西峯Iについた時は、時間切れとなり、C2に収容された。

7月5日。C2から頂上に向った中村、三上、岡井、森田の本隊は西峯Iを越えて主峯との間のコルに向ったが、悪天のため引返しを余儀なくされ、その後も吹雪が続いたので、ついに登頂を断念し、BC移動予定の7月15日を目標に前進キャンプの撤収を行ない、7月12日に全員ベースへ安着。

これにより、われわれの隊は南面からのヘス第二登と、ヘス南尾根の初トレースに成功したわけである。

その後、我々は小型機でBCをスーシトナ氷河に移し、第二目標のヘイズ(4216m)に挑む予定だったが、7月中旬から連日の吹雪で飛行はできず、23日、悪天候を冒して飛来したバイバー機により、一たんグルカーナに引上げた。本年はアラスカの天候は極めて不順で、この際ヘイズは時間的に無理なことが予想されたので、代りに小バーティーによるチュガチ山群の偵察を行なうこととした。即ち、中村、三上、森田、稲垣の4名はアンカレッジ付近のエクルートナ氷河に。岡井、松田、本儀、伝田の4名はバルデズ付近のウォーシントン氷河その他に入り、調査を行なうことになった。



エクルートナ隊は7月28日氷河の末端着。29日快晴に恵まれて氷河上標高1000m付近まで一部の荷物をかつぎ上げてデポ。翌日全荷物を標高1300mのアラスカ山岳会所属の無人小屋に上げ、ここを根拠地とした。31日と8月1日はみぞれのため沈澱。2日と3日はそれぞれ10時間余りを要してエクルートナ氷河西俣を遡行し、氷河源流の偵察を行なった。4日と5日も悪天のため沈澱。6日は曇、時々霧雨。自由行動とし、中村、三上はオーヴィス峯の岩稜へ。森田、稲垣は小屋付近の動植物を鑑賞していた。

8月7日は午後4時バルデズ隊が氷河末端まで車でわれわれを迎えに来る約束になっていた。前夜半から小屋付近は強風雨となっていたが、7日朝から幾分風雨共に弱まる傾向となったので9時半、小屋を出て下山の途についた。百メートル程、岩のガラ場を降りて氷河に出たところでアイゼンを着け、最初の50度の急斜面は慎重に足場を切って降りた。ただしザイルは結ばなかった。このあと稲垣、森田、中村、三上の順で互に20数メートルの間隔で凹面の斜面をトラバース気味に下って行った。

斜面が次第に緩くなってきたと思われる頃(10時10分)セカンドの森田がアイゼンの爪を引っかけたか、つまづいたか、突然前方に転び、背負子を背負ったまま右半身を雪面につけ、足が斜め下になった姿勢でゆっくり滑落を始めた。森田はピッケル停止をしようとするが、姿勢が悪いためか、打所が悪かったためか殆んど効果はなく、その後10数秒、下を歩いていた稲垣はこれに気付いて水平方面に5メートル程戻り、森田の許にかけ寄った時には既に相当なスピードがついていた。稲垣のピッケル停止は極めて有効で、回りに氷片も散り、加速度も減少したが、ふたり分の体重と合せて55キロの荷物を持つ運動量をゼロにするまでに至らず、そのうち斜度55度の急斜面に入って一挙に岩壁に向って二人離れて落下して行った。

森田は岩にぶつかった後さらに岩と氷河の間のシュルントに飛込んで約10メートル滑り落ち、岩と氷にはさまって漸く停止した。

中村と三上は直ちに迂回して現場に向った。幸い事故現場付近には米陸軍山岳訓練隊の9名が居合せ、彼らも直ちに現場にかけつけてくれた。訓練隊のインストラクターであるワグナー氏は状況を見とどけた後、単身氷河を下って、下のキャンプから無電で軍用ヘリコプターの応援を求めてくれた。森田は頭蓋骨、助骨及び腰椎骨の骨折と気胞で意識不明。稲垣は左大腿骨折と左足首骨折で数分で意識を取戻した。現場は岩の急斜面で救出に多少時間を要したが、大雨の中をザイルで担架を吊上げ12時半、二人を安全なモレーンの上に移すことができた。風は相変らず強くヘリは降りられそうにないので先ず重傷の森田を担架にのせて氷河を下り始めた時、風が少し弱まって小型ヘリが強行着陸をしてくれた。13時5分、森田。続いて13時20分に稲垣が救出され下のキャンプから先は大型ヘリでエルメンドルフ空軍病院に運ばれた。

森田は4日間意識不明で重態を宣告されていたが、その後次第に意識を回復し、左半身マヒの状態で生命に別条ないことが確認された。稲垣は11日に左大腿骨の接骨手術を行ない、手術に隊医の岡井も立会った。12日には三上が状況報告のため空路帰京。中旬には両名とも数日中に帰京のメドがついたので、本部と隊で意見交換の上、再び隊としては学術調査など続行することに一致した。

両名はその後空路帰京し東大病院に入院。稲垣は9月8日無事に退院した。森田は現在なお脳神経外科に入院中で、左半身マヒと発語不明瞭は殆ど全快、腰椎のギプスベッドからも解放され、IQも140であるが、事故当日は小屋のカギをかけたところまでしか記憶が恢復せずあと暫く静養の予定である。

原因は転倒の危険の殆どない場所で、運悪く何かのハズミで森田が転※

〝三井松男氏〟文部大臣賞受賞について

望月雅郎

山男には色々なタイプがあるが、若いとき尖鋭的な山登りをし、中年ともにかすんでしまう人、若いときから息ながく、黙々と登りつづける人、また、本や写真集など出版する人、まったくもって十人十色である。

昨年十月九日、体育功労者として、文部大臣表彰を受けた三井松男氏は、息のながい山登りを今に至るまで続けている数すくない岳人の一人である。三井氏の山登りの特徴を一言でのべるならば、山登りを幅広い野外活動の一環としてとらえているということである。

それが証拠には、JACの支部長を十五年間もやりながら、その間、昭和三十六年より、山梨県ユースホステル協会の副会長となり、更に昨年からは専有ユースホステル建設資金委員長の重責をもつとともに今春、その完成を目前にしている。また、全国にもあまりその例をみないキャンプ指導者協議会結成に尽力し、目下その会長として寧日なく活躍中である。

三井氏は、明治四十二年甲府市に生れ、甲府中学時代は、テニス部に籍をおき、甲信大会に二回優勝、また山梨県代表として神宮大会に出場したこともあった。

登山は、中学三年生よりはじめ、昭和二年慶応大学に入学、山岳部員として、四季の穂高岳、剣岳方面にその足跡をのこしている。なお、在学中、独り遠く太平洋をこえて、カナディアンロッキー山系に遊び、昭和八年に同校卒業、以後現在に至るまで、家業の畳材料卸し業を手広く営んでいる。

昨年十一月十九日の三井氏の受賞祝賀会には、支部もその発起人の一端にその名を連ねたが、参会するもの九十有余名、バライティに富んだ友交関係を反映して盛大裡に会を終えることができた。

三井氏は戦時中、三度にわたって兵役にしたがい、昭和二十年に八丈島より復員したが、過日の祝賀会の席上において「受賞するなにものもして来なかったが、一緒にヒマラヤを計画した同僚が急に山で死に、戦時中生死をともにした人たちはほとんどこの世にいない。受賞して心痛むものがある。」とあいさつしていたのが、今心に残っている。

三井氏は、家業に従事するかたわら山梨県の岳界に近代登山技術をひろめ、甲斐山岳会、南嶺会、鶴城山岳会等の結成に参画し、また戦後いちはやく、県岳連、県遭難対策委員会の組織を確立し、今日の県山岳界の基礎を築きあげた。

三井氏は愛称「象」さんといい、その名の通り、若干オツムの方は年期が入ったが、その童顔は昔も今もかわらず、さらに月並みではあるが、人格円満、身を処するに常に分を忘れず、万事ひかえめである。また縁の下の力持ちに甘んじ、黙々として身を挺するさまは、最近の時世の中にあって、誠に得がたい人であり、このような人を、JACの役員の一員とし、また山梨支部の支部長と仰ぐことのできることは、支部員一同、他に誇って余りあるものであると信じている。

このことは、過去、昭和三十二年、山梨県体育功労者として表彰され、昭和三十七年には日本ユースホステル協会の表彰を受け、さらには、昭和三十二年国から、勲五等瑞宝章、勲六等旭日章を授与されていることもこの証左である。

一方三井氏は、エッセイストとしても、つとにその名を知られ、慶応山岳部報「登高行」のセルカークの山旅「岳人」の夜叉神峠など、読む人の心にしみじみと通う名文をものにしている。このように、人の魂にくいいるような文章、それは、やはり山登りを野外活動の一環としてとらえ、次の世代を背負う若い人々の立場のよき理解者としての四十五年間にわたる行動からの語りかけが、万人の共感を得るものと信じている。

ここに三井氏の業績の一端を述べ、受賞の喜びを関係者と共にわかちあいたいと思う。

（終り）

◇冬の山にて◇

水田健之助

雲去りて立岩据らく冬の山
冬霧や立岩見た瞬森しじま
立岩の枯蔦が捲く祠赤
立岩を攀じ初明りに刻を知る
巨岩より鷹翔けゆけり名石に
冬山のしじまぞ深し天祖山
昼の蟲鳴くや時雨るる篭堂
遠山の入日やすらふ残菊
秋刀魚焼く香に来合せし山の家
芋掘や部落はみんな大にぎわい

◇　◇

あの岩壁に未知の人みゆ黄岩松
石蕗こぼれ岳人の歩みしづかなり
休火山なぞえの里は秋深む
（鬼石の寒桜山）
爽やかに師走の花見寒桜
岩登り懸垂下降者落葉焚く
柊や稀れに富士見る雪着たる
岳人のチムニー登攀秋歓喜
試験終え学生雪山に発ちにけり
大棉や岳の戌亥はつねに冷え
日光の墓地鎮まりぬ寒鴉

◇外国山岳会バッヂ——◇
◇寄贈についてのお願い◇

会報二五九号に織内信彦氏が、アルパイン・クラブを訪問したところ各国の山岳会バッヂのコレクションがあって大へんうらやましかった旨の記事がみられるが、英国だけでなく他の国の山岳会にもこの種のコレクションを行なっているところは多い。

本会でも最近は外国人登山家の来訪が続き、こうした機会にバッヂを記念においていかれる方もある。

そこで本会では、これらバッヂの保存のためにこの度会員中川武君を煩わしてバッヂ用の額を作成し、談話室におくことにしました。

しかし本会に在庫しているバッヂを並べてみたものの数が意外に少なく、いささか物足らないので、会員各位の中で外国山岳会のバッヂをお持ちの方から提供して戴くことにしました。何卒御協力下さいます様お願い致します。

（松田）

× × ×

尚、現在のところ集まっているのは左記の通りです。

記

①台湾省山岳協会
②台北山岳会
③中国青年登山協会
①～③については訪日登山隊来日の際に本会宛に贈られたもの。
④韓国山岳会
本会60周年祝賀パーティーの時に来日せる訪日登山隊より贈られたもの。
⑤シェルパ・クライマーズ・アソシエーション。（寄贈者　松田雄一）
テンジン来日の時に受領したもの
⑥グルジア山岳会
訪日登山隊より本会におくられたもの
⑦ドイツ山岳会
42年4月、アッディ・マイス氏より本会におくられたもの。
⑧ドイツ山岳会（A.V. Sektion, Bergfried）
オットー・H・ローレンツ氏より本会におくられたもの
⑨Himalayan Mountaineering Institute（ダージリンの登山学校）
（丹部節雄氏寄贈）
⑩アルパイン・クラブ
（杉田博氏がA・Cを訪問した際、預ってきたもの。「山」二六六号八頁参照）

※んだ点にあると考えられるが、われわれとしては背負子が外し難くて、ピッケル操作が十分できなかった点を反省し、今後のために背負子の改良を計画中である。また転倒時極めて滑り易いズボン式の雨具は場所によってなるべく避けた方がよいという意見に達している。

中村純二

東京大学アラスカ学術登山隊
隊員構成と担当は次の通り。

隊長	中村純二(43)	夜光観測
副隊長	三上良治(31)	総務
医員	岡井清士(31)	高所医学
隊員	森田尚幸(26)	地質・庶務
〃	稲垣忠男(24)	渉外・輸送
〃	松田　治(23)	海洋・装備
〃	本儀　隆(22)	気象・会計
〃	伝田克彦(22)	食糧・記録

× × ×

この記録は中村会員より深田理事に手紙と共に送られた「東京大学新聞」に二回にわたって寄稿されたものをアレンジして掲載したものである。記して感謝の意を表する次第である。

（注・「中間報告」その後入手）

会員通信

☆南会津の峠・高原・山☆

川崎精雄

十月七日、上野で鈍行に乗る藤島、望月両氏を見送り、私は急行で追抜き白河の会員室氏宅泊り。両氏は後から白河通過郡山泊り。八日午前零時の上野発に四人落合い若松に着くと、迎えたのは一つ前の汽車で上野から来た人。それが張切っていた村尾金二氏が来られず、なんと京都出張中の筈の近藤氏だ。

若松からタクシーで高田に出て、海老山峠下から歩く。強い雨が時折降る。新道が峠を越えている。眺望の効く山上の部落にグミが実りダリヤが咲いている。二つ目の漆峠は雑木の紅葉した味のある峠で、谷を隔てて博士山の頂上が仰がれる。登高に骨の折れる石楠花尾根も眼前にある。峠手前の高森部落も、急な所の漆の人家も雨で淋しい。

博士山の麓、大成沢に下り、軽トラックを頼み冷雨の中を上流喰丸峠下まで。こんな山中に稲田が多いのに驚く。峠を越え喰丸着五時。岩代屋という雑貨店兼旅宿に泊る。室氏が漆峠で採った茸の汁に満腹。藤島、近藤両氏は今日の登高メートル数の測定微に入り細に亘り、例えば峠越えを部落から測るのは誤りで、彼処では沢を越して部落に入ったのだから沢筋の高さから計れなど喧々、室氏まで応援に加わって遅くまで三人論議を重ねた。

九日快晴。宿の前の小さい清流の岸の芒も露霜に濡れ、前山の紅葉も色を増した。その山の小峠を越えて高原状の道を大芦に着く。最山奥に拡がったかなりの聚落で、曲り家もあった。

暑い位の太陽をまともに、転石峠への道を行く。田畑は取り入れの最中だ。村から離れた畑小屋の人家を過ぎて、原生林の道は急に笹に蔽われ、昔の銀山平を思い出させた。

転石峠の上は尾根の乗越しの感じで眺望のない雑木の中だ。こんな峠も良い。すぐ下の沼地いっぱいに穂芒が陽に輝き、芒の中に藁屋根の廃屋が二軒埋もれていた。判り難い沼地の径を、針生に向って下る。芒と小木と篠竹が生い茂って歩きづらい。然し下るにつれて高原状の気分高まり、芒の波の向うに七ケ岳が夕日を浴びて美しい。

街道に出てバスを待つ間、二人の酒仙は近くの雑貨店を視察された。熱心さ敬服に価する。針生の宿、住吉屋着五時。前以て地元の会員小滝氏を通じて知らせてあった、というのは私、小滝、室三人の属する「南会津山の会」が二日前この宿で集まったからだ。古い土蔵の二階座敷の床が傾いているのも宿場らしい気分だった。夜、電話により小滝氏オートバイで来訪、藤島、望月、近藤三氏と初対面。

十日快晴。昨夜猛烈に凍みたので、四辺の山々の紅葉が一段と鮮かだ。藤島、近藤両氏を口説き、七ケ岳へ登ることにする。登高メートル数が稼げることと故直ちにOKとなる。今日帰京の望月氏だけが、駒止湿原見物と決る。

望月氏の代りに小滝氏参加、七ケ岳へ向う。保城峠へのこの道は、私は二十七年振りと思うが、藤島氏は恐らく四十余年振りであろう。高まるにつれ駒止から転石、船ケ鼻などの山なみが手にとる如くだ。小滝、室の地元勢とあって茸の採集夥し。七ケ岳の岩肌の沢は先日中の降雨で見事な滝状をなしていた。久澗の頂上は、登山路は出来ても昔とあまり変らない様だ。頂上で乾杯。藤島氏の年令と、近藤氏の肥満体を共に物ともしない元気は驚きだ。

羽塩に下ったのは五時、雑貨店視察。小滝氏は田島の自宅へ。四人は滝ノ原の三滝温泉へ。

十一日快晴。室氏は甲子峠を越えて白河へ。(シメジを沢山採った由)三人は再び小滝氏から見送りとシメジのお土産を頂き、バスで山王峠を越え川治に抜けて、東武電車で帰京した。

一行＝藤島敏男、近藤恒雄、望月達夫、小滝清次郎、室次雄、川崎精雄。

◇コルチナ便り◇

斎藤晋

(1)

日本を出るまでは大変ありがとうございました。昨日、コルチナへ着き、やっとのんびりしているところです。

バリからすぐチューリッヒへ飛び、ほぼ一週間、スイス内にいました。

シーズン・オフなので登山者もなく、山小屋などもしまって、それに私一人なので登るのには大変苦労します。しかし、ユングフラウではとてもよく晴れたのでクラストした雪の上で遊んできました。また、大先輩の登ったアイガー東山稜、ウェッターホルンなどを眺めて、日本人の行動について考えています。コルチナではゆっくり休日を楽しみたいと思っています。

(2)

コルチナにきて、もう一週間以上過ぎました。山小屋やガイドが使えないので大きなものは登れませんでしたが、コルチナ付近の山に登りました。クリスタロ・グループの小さな壁、Dossod, Tofane の壁などですが、これらはとても素適な登攀を楽しませてくれました。もっとも一人だけなので、難しいところは登れず、もしパートナーがいてくれたらと、ひじょうに残念に思っています。

山頂や山の上部はすっかり雪におおわれ、所々がクラストしていて、雪歩きの楽しみもできました。

もう、この付近の人たち(ガイドも含めて)は登らず、雪のある所では、カモシカと僕だけでした。雪の上にはカモシカの足跡だけで、そんなカモシカ道を下ったりするのは、ちょっと珍らしいかもしれません。

これらの山には、非常に立派な登攀のトレーニング場があります。長い垂直な壁、まっすぐなチムニー、このような所で登攀を楽しみました。ポマガヌニンにあった20メートルぐらいのまっすぐなチムニーでは登山の教科書のように登れました。

登りたかった Cime di Lavaredo は眺めただけに終りました。季節も遅いことですし、仕方ありませんが、非常に残念です。まだ近くて登りたい山がありますが、もうコルチナを離れなければなりません。ある意味ではコルチナの休日を楽しめたと思います。

コルチナのバーではガイドと仲良くなりました。彼らはもうスキーのシーズンだといって、スキーの真似をしてみせたり、いろいろと話しかけてきます。また、C・A・I・の人たちとも話合い、そのうちの一人が僕の胸のJ・A・C・のバッヂの横に彼らのバッヂをつけてくれました。彼らはC・A・Iの素適な会員手帖を持っていて見せてくれました。それから、コルチナで店をやっているK2の Lino LA CEDELLI にもあいました。大型の男で、でかい手で握手をしてくれました。どうぞ皆様にもよろしく。

(吉沢一郎宛)

◇カトマンズより◇

(五七二三) 宮森常雄

只今ネパールに来て居ります。郡山のかたで新潟大の二人だけでサラグラールを登り、今日又郡山のかたで信州大の山岳部員にカトマンズで会いました。

県単位で面白いパーティーが出来ないかとそれぞれの方にいわれました。伊藤会長にお話してくれとの事でした。ティリチの高橋照(定昌?)さんは六、五〇〇メートルまで登られました。

(伊藤支部長宛)

☆中央ネパールへ☆

松島静吾

前略　そろそろ山の初雪の便りも聞かれる頃となりましたが、お変りなくますますお元気にお過しのことと思います。

さて、私この度皆様のよき御指導と御理解によりまして北大の理学部に登山本部を置く中央ネパール踏査隊に参加し、約二ヵ月間、ネパール・ヒマラヤの調査をしてくることになりました。

現在、ネパールは登山禁止中ですので登頂することが目的ではありませんが、それなりの成果は得られるものと確信致しております。

左記の通りの日程ですので御報告申し上げます。

9月27日～29日　羽田→カルカッタ→カトマンズ

10月1日～13日　ランタン・ヒマール方面踏査

10月23日～11月27日　アンナプルナ・ダウラギリ方面踏査

12月10日　ボカラ→カトマンズ→カルカッタ→羽田

（一九六七年九月二十五日）

◇テヘランへ◇

（五〇六五）曽根原憲夫

このたび社命により、イラン国テヘラン事務所勤務として赴任することになりました。東京在住中はいろいろとお世話になり有難うございました。

事情が許す限り家族も呼びよせ長期戦（五～六年）の心積りでおりますのでよろしくお願いいたします。

金星に手のとどいたこのごろ、地球は一層せまくなりました。

中近東を通りすがりの節は、ぜひともテヘランにお立寄りいただけるようお待ち申上げております。

十一月二日

（現地連絡先）

c/o Sumitomo Shoji Kaisha Ltd., 11. Ave. South Saba. Teheran, Iran, P. O. Box :2521, Tel :49378 (Teheran)

◇帰国挨拶◇

（五九三三）八島晃

（竜鳳登高会）

謹啓　山々はすでに冬将軍の訪れを知らせる今日この頃ですがいかがお過しでしょうか。

六月七日羽田よりヨーロッパアルプスへと向い、出発当初の目標であったチロルの山々とドリュー北壁の登攀をなし、十月五日シベリヤ経由にて帰国致しました。現地からの連絡もせず御心配をおかけしましたが、無事帰国できましたことをここに御報告いたします。御協力御支援に感謝いたすと共に今後ともよろしく御指導の程お願い致します。

昭和四十二年十一月

会員短信

年次晩餐会の返信の中より、二、三の方の近況を御紹介致します。

一七三〇　浜野正男

このたび九州の支店に変りました。大阪からだんだん南に移ってしまいました。今後ともよろしく。

（住所は、住所変更欄参照）

二二五五　酒井俊雄

御多用、御連絡多謝、遠隔の事と、先般事務局への書翰の通り、胃潰瘍、腹膜炎にて手術、引つづき入院加療中にて出席不可能。御諒承願度。御盛会を遥かの地より祈り上げております。

三七八二　新井清

本年の晩餐会を楽しみに致し、ヘディン先生の署名入セントラル・アジア第一巻と自筆書簡を持参すべく用意しておりました。老父（85歳）臥床のため止むなく欠席致します。御盛会を祈ります。ベルグハイル。

一三七五　加藤数功

病気入院中のため失礼致します。御盛会を祈ります。皆様によろしく。

三四一　槙有恒

冠省　御案内賜りありがたく御礼申しあげます。年度最後の楽しい会合として期待いたしておりましたが、あいにく、この日は福岡に参る先約のため、洵に残念乍ら失礼いたします。

四五四二　高尾徳繁

福岡県山岳連盟二十周年記念行事日と重なり、残念乍ら欠席いたします。

（なお、この件に関し、末松福岡支部長より、当日「マキセンセイゴライコウカンシヤス」との電報がありました）

なお、冠松次郎名誉会員からは病気のため、又田部重治名誉会員からは「冬の夜は外出しないことにしています」との御連絡をいただいております。向寒の折柄、御健康を祈念いたしたいと存じます。

【特別通信】

☆ハインリッヒ・ローレンツ氏よりの礼状☆

「私たちの日本旅行中、御親切におもてなし下さった日本山岳会の多くの方々に対し深い感謝の念を持っているにも拘らず、今日になって始めて筆をとったという事を先ず御詫び申し上げねばならないと存じております。

しかしアフリカ廻りで四十一日の船旅の末、再びヨーロッパに入り、ミュンヘンに戻りました時、実際には色々仕事もたまり、公用の文書も出さねばならず仲々個人的な手紙を書く余裕が御座居ませんでした。

そうこうしているうちに、長い極東旅行から帰ってもう二ヵ月も経ってしまい、そうしてみると日本に於ける私達の経験なり印象なりがある種の間かくを以って観察する事が出来る様になるものです。

世界の多くの山々を登ったり見たりしてしまった後での私の最後の望みの一つはあの有名な富士山を少くとも見るだけは見たいという事でした。そして此の望みはやっとのことで叶えられました。私は病気の為、頂上には登ることが出来ませんでしたが、船津に十日間滞在中、此の美しい形姿の山を毎日見る機会を得ることが出来ました。

それだけでなく九州に行って阿蘇にその火山活動中に登ることが出来、更に上高地周辺の日本アルプスの山々に遊ぶことが出来ました。

私達は日本からアルプスの感銘を得たのみならず、貴方の国の偉大な過去やその当時の建築芸術の生証人として宮島（厳島神社）や京都や奈良の様な有名な古い都に於ける壮大な古い神社仏閣を見る事が出来ました。

しかしその最も美しいものとしては日光の家康と家光のあの素晴しい霊廟を見た事であります。最高の古い日本の芸術の此の驚くべき作品は私達が今迄に世界で見て来た最も美しい建築芸術に属するものであります。

亦私達は日本国民を貴方の国の色々な処でその最も良い側面から学ぶ事が出来ました。

私達が「ドイツ」として到着する処は何処でも私達は最高のおもてなしを、最高の賓客としての待遇を、そして非常なる御助力を到るところで戴きました。

特に日本山岳会の多くの御親切な会員の方々には深く感謝申し上げております。事実その方達の心底からなる御助力なしには、私達は到底これ程よくあちらこちらへ行く事は出来なかった事でしょう。

更に私は関西地区の津田周二氏、前田浩氏・仲野和也氏そして住吉仙也氏亦特別な方法で船上で非常なる歓迎をし且つ続いて行った神戸と京都への私達の無事な旅の為に骨を折って下さったヒマラヤの登山家である平林克敏氏に対し大変に感謝申し上げて居ります。

京都に於ては大津のユースホステルへ連れて行って下さった津田康祐氏並びにヒマラヤ登山家の松村多四郎氏に御礼を申し上げたく思います。御二方は京都に於ける御案内と御面倒をおかけし、見るべき価値のあるものすべての御指示並びに説明をして下さいました。

松本ではそこの支部の指導的な立場にある高山忠四朗氏並びに二木氏の知己を得まして、上高地の山岳会クラブの小屋に滞在出来る様計らって戴きました。

そして最後に東京では、松田雄一氏・関口周也氏並びに藤沢の貴君の友人、宮下啓三氏を知り、又大井正一氏には殊の他御世話になりました。

若し貴方々がミュンヘンに来られるなら、或いは貴方々の御知り合いのどなたかが見えられるなら、どうぞ私共のところに必らずや御訪ね下さる様御願い申し上げます。ドイツ山岳会の私の友人達や私は貴方々が私達になさって下さった様に、充分な御助力を致したいと存じております。

私の妻と私は此の日本旅行から決して忘れる事の出来ない美しい感銘と経験を以って帰って来ました。私達は日本で撮った多くの写真を見る度に日本を憶い出すでしょう。亦私は山岳会の集りで私が講演をする時、常に美しく興味深い貴方の国を充分に申し述べて見たいと思います。

私は貴方並びに日本山岳会の貴方の山友達に良き山行の年である様望んでおります。

私はギュンター・ハウザーから個人的によろしくとの御挨拶を申し伝えます。

敬具

追伸　皮膚病の私を大変親切に御診察下さった辰沼博士にどうかよろしくと御伝え下さい。

◇　◇

この手紙は、本年五月から六月にかけて来日したローレンツ氏よりの礼状であります。同氏の来日中大変お世話をおかけした皆様方の御厚情に対し深く感謝を申上げたいと存じます。

海外連絡委員会

鈴木郭之

・・・・・昭和42年度・・☆年次晩餐会☆・・

・・・・・・・・・山崎安治・・

恒例の昭和四十二年度年次晩餐会は十二月一日新宿伊勢丹会館八階プリムラで行なわれた。出席者は二百名を突破する盛況で係りはてんてこまい。初め会場中央に予定していた「明治百年この一本展」も入口に場所を移すしまつであった。午後六時四十五分松田常務理事の挨拶につづき、成瀬岩雄氏の司会で会が始まった。こういう会の司会というものはなかなか大変なものである。まず例によって松方会長が会の近況を報告する。

「JACの事務所が原宿から七月向井ビルに引っ越した。これについては会の皆さんに大変やっかいになった。これは日本山岳会の歴史の中の一つの事件といえる。八百万円の募金計画は現在八十四パーセントの六七〇万円集まったが、もう少し歩いて、集めたい。外国から人が来てもはずかしくない立派なルームなので、今後ルームを大いに利用してほしい。九月に披露パーティをやった。

「山日記」は十二月一日に出た。「山岳」は本年中に出したい。会報は二六二号から二六九号まで月一回出している。今年海外に出た隊は六十五隊（または六十四隊）そのうちわけは、ヨーロッパ九隊、ヒンズークシュ十二隊、アラスカ・カナダ四隊、アンデス七隊、ネパール五隊、その他二十一隊でその中には日大のスピッツベルゲン、イラン、台湾などを含んでおり、いずれも本会の会員がそれぞれ参加している。

本会のエベレスト計画については、時々新聞に行けるのではないかなど伝えられるが、実際には一歩も前進していない。向うからの反応も今日なお出ていないのが実情である。婦人部が中心になって来春日印合同登山隊がチャンバ方面に出かける計画が進められておりメンバーもすでに決定している。

海外の登山者との交流も盛んで、ACのバンクス氏などを始めJACを訪ねてくる人が増えた。来年はアメリカあたりから大量の登山者がやってくることになっている。

登山者の世界的団体であるUIAAにJACが正式加盟することになった。現在の会員数は二五二三名で、そのうち名誉会員十三名、永年会員十九名である。

次に会員で国から表彰を受けた人を紹介する。村井米子さんが自然保護運動に対する貢献により厚生大臣賞、三井松男さんが登山青少年体育運動に対する貢献により文部大臣賞を受けた。また平川、矢田、藤山、石井（鶴）の各氏が、それぞれ勲章をもらったが、これは直接山とは関係がない。」

なお会長から別項の通り、今年度新しく名誉会員、永年会員に推薦された六名の長老の紹介があったが、最後に松方さんは、自分も今度永年会員に推薦されたと小声で述べ、三田副会長から銀のバッヂを贈られ、一段と拍手が沸いた。松本善二氏が乾杯の音頭をとって食事に移り、一段落したところで司会者からまず石田吟松画伯が指名された。

「私は木曾の寝ざめの床からやってきた。明治四十五年八月十四日、中房温泉で奥さんをつれた西洋人に会った。燕岳に一緒に登ったが、途中、六根清浄をとなえ、日本語で君は日本山岳会員かと質問された。まだ五十歳ぐらいで横浜の宣教師だということだったがあれがウエストンであった。いまの中房の百瀬孝君のお父さんの独身時代のことで、当時泊った部屋はまだ残っている。ああいうものははっきり分かるようにしておいたらよい。」

中屋健一氏「司会者は私の小学校、高校時代の先輩などでことわるわけに行かない。小学校の時は五年先輩だったが高校の時は一年しか違わなかった。どういうわけかわからない。最近渡辺兵力と話しをしたのだが、大体近ごろの山スキーはなっていない。第一かかとの上らないスキーしかない。私はフイットフェルトのスキーを使いテレマークを見せたところ、おじさんそれは何だという。テレマークだと説明したら、ああ歌にあったねえとぬかした。ああいう技術は無形文化財として残し、山岳会で表彰してもらいたいものである。」

今西錦司氏「今年は妙な年で、八月の初めは鹿島の狩野のおばあさんに会ってきた。その月の終わり、文部省の登山研修所に出かけ、帰りに芦峅に行き栄作、宗作、福松の墓参りをしてきた。しようと思っていたことがはからずも出来て非常にうれしい。秋にも常さんの碑の除幕式に参列してうれしかった。新雪の穂高をあおいだのは三十年ぶりであった。畳岩などを眺めあのころよくあんな所を登ったものだと思った。ひまを見ては近まの山を登っているが、今年は正月以来三十の山に登った。ここ数年の最高記録である。しかし隣りに座わっている口の悪い大先輩（藤島敏男氏のこと）は君の登った山など山のうちに入らないとおしかりをうけてはずかしい」

吉沢一郎氏「会報を編集している。顔だけでも憶えて下さい。来年はサルの年なので、サルというと今西君を思い出す。人間よりサルのほうが利口だという論文を書いてくれと頼んであるのだが、アフリカへまた行くとかいってなかなか書いてくれない。アフリカから帰ったら是非書いてもらいたい。私は会社よりも、家に帰った時の方がいそがしい。会報は正規に出すように努力しているのでよろしくお願いする」

高田光政氏「今日出席出来て非常に光栄である」

次に今度出来たクラブ・タイのデザインを担当された川森左智子さんは「これから会へくるのにクラブ・タイをつけない人は罰金をとって下さい。皆さんに買っていただくよう協力をお願いする」と述べ明春インドに出かける日印合同隊の日本側メンバー須田、武田、三島、宮崎（折井欠席）の諸嬢を紹介された。

麻生武治氏は相変らず元気で、「皆さん今晩は、ぼつぼつ眠くなる時間である。今年も僅かになった。サイレン・ナイトか、シューベルトの子守唄など歌わしてもらいたい。今年五月ツェルマットに行ったら、アメリカの婦人からチベットから来たのかと聞かれたのには驚ろいた」と一同を大笑させた。

津田周二氏「シャトルと神戸と姉妹都市になり、アラスカに行ってきた。いま神戸に二年計画で山岳会館を計画している。是非設けたいのはライブラリーで、藤木さんの蔵書をゆずり受ける予定で日本にないようなものを作りたい。」

板倉勝正氏「私は隣りに座わっている関根吉郎氏と同年である。これからも山に親みたい。」

藤島敏男氏「ただいま司会者が世迷いごとのようなことをいっていると思ったら自分のことであった。山岳会には大正八年十一月入会、会員番号は七一〇番である。もう一、二年すれば永年会員になれると思うしそれまで生きているだろう。からだは丈夫でひまもたっぷりあり、全部ひまで、ひま以外のものは何もない。藤島さんは無用族だとある先輩の奥さんにいわれた。無用族は社用族よりよっぽどましである。今年は十四回山に行き、月一度以上出かけた。この年のはじめ会報にも書いたが今年は全部で二万二千メートルちょっと登った。あと一回行く予定だから二万二千と三千の間は登る。からだが丈夫でひまがあるだけではない。私はある学校を出たがその学校には山岳部などなく、私はいきなりJACに入った。学校時代山に登っていた仲間はあわれなサラリーマンとなり山をやめてしまった。私がそんな連中と山に登っていたらあえない最後をとげていたろうが山岳会にいたためいまだに山に登っている。私には母校より山岳会のほうがずっと大事である。山岳会というものは自分のいた学校があってもなくてもいつまでたっても山に行ける。反対の方があったら御意見をうかがいたい」

小林義正氏「この一本展は準備が不充分だったのでごようしゃ願いたい。高い山には広いすそ野があるのと同じように、明治の山の本を眺めていると有名な山の本も、こうした底辺から盛り上って出てきたものであると、そういった感じがする」

最後に六日町の青木英治氏が日印合同登山隊の成功を祈り、少々調子っぱずれだったが佐渡おけさを唄われ、にぎやかに楽しい会の幕を閉じた。（完）

○四十二年度年次晩餐会○

――出席者名簿――

青木一夫　青木英治　青木昇
安彦六郎　今西錦司　今井友之助
今井嘉道　今井雄二　今井喜美子
伊藤英三郎　石井三知子　石原憲治
石村実　入沢文明　岩野正代
岩永信雄　飯野亨　板倉勝正
井上綱　梅野淑子　遠藤禎一
小野敏之　岡本陸人　岡部浩子
岡本清一　岡本竜行　大森薫雄
大森藤政　大野真一　大橋晋
大塚博美　大貫良夫　織内信彦
折井健一　長田義則　往古豊秀
尾上昇　奥井清　奥川雪江
魚木定良　麻生武治　石田吟松
池田光二　河村栄二　加藤泰安
神谷凡夫　神谷恭　川村旭
川森左智子　川上忠義　勝田房治
亀井公　雁部貞夫　風見武秀
片野次雄　菊地文雄　黒柳満義
黒石恒　久地岡サナエ　隈部恵子
工楽英司　河野長　河野幾雄
近藤恒雄　小林幹三郎　小林義正
小林猛臣　小早川宏　見学玄
佐藤久一朗　佐藤隆太郎　佐藤テル
佐藤佳年　坂倉登喜子　斎藤桂
沢登均　桜井信雄　酒井敏明
坂本筆三　辺夏雄　進藤波男
白川義員　城谷一誠　城山正三
鈴木昭　鈴木英一　杉山孝
杉田博　須田紀子　関口周也
関根吉郎　瀬名貞利　ソベニア
田中弘士　田中弘美　田中正智
田村扇一　田口三郎助　田畑真一
田辺恵造　田崎市松　高橋定昌
高橋照　高田光政　高山忠四朗
武田育子　武田満子　竹田寛次
丹部節雄　伊達篤郎　滝島清
滝口幸　茶谷東海　津田周二
鶴岡元之助　冨田美知子　外山義夫
堂本暁子　徳永芳雄　中田勇吉
中西豊和　中村謙　中屋健一
中河与一　中保　中島寛
名児耶達男　名須川浩　永井清一
永原輝雄　長尾悌夫　成瀬岩雄
梨羽時春　錦織保清　沼倉寛二郎
野上成勇　野口末延　中世古隆司
林和夫　浜野吉生　日高信六郎
日下田実　広瀬一隆　広羽清
広谷光一郎　平沢亀一郎　平位剛
平山武志　藤井運平　藤島敏男
福田良　深田久弥　船越好文
古沢肇　袋一平　二木信次
堀川英司郎　堀田弥一　細川雅弘
松方三郎　松田雄一　松田柳子
松下肇　松原善志　松本善二
松本熊次郎　松野洋人　牧繁録
牧野衛　牧野文子　牧野四子吉
牧野内昭武　三浦多美子　三浦義明
三島蓉子　三田幸夫　宮崎英子
水野公男　村石幸彦　村木潤次郎
村上勝太郎　村井米子　村尾金二
森山勇　望月達夫　諸岡一次
宮崎辰雄　松井芳隆　山口健児
山口節子　山本良三　山崎安治
山崎金次郎　山野井武夫　山里寿男
山下一夫　安川茂雄　山本朋三郎
尹官炳　吉村睦人　吉田久兵衛
吉沢一郎　吉武正子　吉崎四一郎
芳野菊子　芳野赳夫　渡辺公平
渡辺兵力（以上二〇九名）

◇　◇　◇

御願い！

理事会

昭和42年度の年次晩餐会は、出席申込者二四七名の中三八名の方が無断で欠席されたため、一〇四、四六〇円の赤字を生ずる結果になりました。何分年次晩餐会は、一人ずつテーブルにつく関係上、料理の予約取消にも限度があり、この様に多人数が無断で欠席されますと如何ともしがたくなります。

就きましては、まことに恐縮に存じますが、出席の通知をだされた方で、当日無断欠席された方は、できれば会費一五〇〇円也を本会事務所までお送り下さい。

（伊倉剛三氏からは事前に欠席の連絡を戴きましたが、会費一五〇〇円を送付して下さいました。紙上をかりて御礼申上げます）

なお、今後はこの種の会の出欠については、**当日の正午**までに、欠席の意思表示のない方からは、会費を徴収することを、十二月七日開催の理事・評議員会で決めましたので、この点も併せて御連絡申上げます。

☆M・クルツの☆業績 II

I・Y

英国山岳会の会員になってからは、その国の登山家とも次第に相識るようになり、そして一九二六年に遂に機会が訪れて来た。英国のHarold Posterが、N・Z・登山隊に彼を招待したのである。彼は一行とともにクック山群で幾多の困難な登攀を行なったが、その中には、タスマン峰（三四九八メートル）の第四登と、それの初縦走が含まれている。

又、次に彼はG.O. Dyhrenfurtが中心になって組織した国際ヒマラヤ遠征隊（I HE）に、地形学者兼登山家として参加した。これは有名なDr. Jacot-GuillarmodやHenry F. Montagnier等と相談した結果であるという。

一九三〇年の六月八日に彼はカンチェンジュンガの北方にあるJongsang Peak(7459m)に初登頂したが、これは当時としては、山頂まで達した最高記録であった。出発してから六ヵ月目にしてスイスに戻り、ディレンフルトの報告書（一九三一年刊）につける地図を完成した。

一九三二年になって今度はヒマラヤの南辺に行く機会が訪れて来たが、この時は地形学者としてではなく、英国人旅行団の世話人としてであった。シッキム、ガルワール、カシュミールと歩き、ナンガ・パルバットの山麓にも近づいた。

一九三四年、G・O・ディレンフルトは再びIHEを組織し、カラコルムへ入ったが、これに参加した彼は、馬での旅行中、不幸にも膝を挫き、何週間も床に臥さなければならない仕儀となった。そのためこれが彼の最後のアジア旅行となり、以後ヒマラヤとは机上的にのみ取組まなければならなくなったのである。

このようにして彼が一九三三年に、SACの"Die Alpen"に発表した、「ヒマラヤ誌」を私は読むことが出来たという訳である。欧州にもわれわれの知っている世界山岳誌の研究家が何人かいるが、クルツは確かにその最右翼にいた一人であろう。

彼が"Alpinisme"誌に"ヒマラヤの問題"を書いた一九三四年の頃には、多くの国の山岳会の名誉会員に推されていた。

第二次大戦中は何をしていたのかわからないが、一九四五年にはスイス山岳財団の委員に選ばれている。

それから有名な"Mountain World"(Berge der Welt)を一九四七～一九五三年まで続けて編集した。AJやAAJと同じように世界の登山家が、毎年その出版を待ち受けるようになったのも、彼の該博にして精確な知識を基礎にした良心的な編集によったものと思う。

彼の最も優れた著作はいうまでもなく、一九五九年に刊行されたヒマラヤの記録（四五〇頁）で、これは三巻をもって完結の予定であったが、重病のため遂に初志を貫徹することが出来なかった。だが一九六三年に、少し薄い「補遺」が出版された。現在この二冊を日本で買うと約一万円になる。しかしやがては優れた山の古典として入手が難しくなる書物となろう。（完）

やっと解った・F・M

ここにいうFMとはAMに対するFMではなく、F. M. Baileyのそれである。近く「あかね書房」から訳本の出る彼の著、"No Passport to Tibet," London, 1957は、一九一三年に同僚のH. T. Morshead大尉と共に、捕蝶網以上のものは何も持たずに、ツァンポ河とディハン河（ブラマプトラの上流）の関係を調べに行った時のことが書かれている本である。それまでに想像されていたような大滝は無かったが、両河が同じ河であることを最終的に決定した探査行であった。その本が四四年もあとで漸く出たのだから相当ごゆっくりの本である。

彼がアルパイン・クラブ（英国）の会員でないのも不思議なことの一つであるが、一体生きているのか死んでいるのかも瞭っきりわからない。大体は、昔活躍していた人でも第一線から退いてしまうと、あとの消息はわからなくなる場合が多い。日本でもそうなのだから、外国人の場合ともなれば一層そうなるのも無理はない。

ところでわが国のこれと思われる人々の誰にもわからなかったベイリーのFMが、Frederick Marshmanとわかったのは、最近船便で届いたG. J.の九月号（67）の追悼録によってであった。それに"Feb. 3, 1882～Apr. 17, 1967"ということもわかった。これで又、しこりが一つとれた。（吉沢）

図書紹介

上田哲農画文集『山とある日』

画文集としては第二冊目にあたるわけだが『日翳の山　日なたの山』の前著に比較すると絵よりも文章に比重がかかっており、絵は殆んどモノクロームの墨で描かれており、額縁のような役目を果している。

上田さんは水彩画家であり本業は絵にあるが、山について私の知る限り文章のシャープさ、かるみのある飄逸な味いなど、山の絵と共に多くのファンがいる。じつは私もその一人であり幅の広いアルピニズムの実践者としてもっとも尊敬する先輩の一人なのだ。

最近の傾向として登山をかたくなに一つの面のみしか見つめようとしない風潮があるかにみえるが、ワンダラーとしての山旅からクライマーとしての岩壁登攀まで一つの次元において咀嚼し十分に消化しきっている著者の山への態度と行動はじつに立派だと思う。

もともと上田さんは私たちの山仲間第二次RCCの同人であり、一時期代表をもお願いしたことがあるのだが、なんといっても感心するのは若い人びとの登山についてつねに深い関心を払っている若々しさである。

ことに昨年カフカズ隊々長として、私はヒンズー・クシュ隊々長として毎晩のように顔を合せていたが、つねにさいごはアルピニズムについての論争となった。自分の山登りを可能なかぎり熱心に追究しようとする上田さんの山への献身は、芸術における次元と同様、ついに「アルピニスト発狂説」にまで発展してしまう。そのような山への一途さに又私は惹かれるのだ。

掲載された文章は折々に山の雑誌に書かれたものだが、一冊になって読んでみると、前著以上に前向きになり執拗に山を追究している著者の姿勢がよく窺える。

「無用者と岩」など読むと一廻り以上年下の私など恥づかしいおもいで著者の若やいだ気迫に圧倒される。私には書評はしがたい。ただ本欄の図書紹介としてこの一冊の本が五十六歳の一人の登山者と山との時間と空間を超えた接点について味わい深い秘蹟を示してくれていることだけは確かである。

ただ惜しむらくは画家上田哲農を顕示すべき巻頭三点の原色版の色彩がきわめて不鮮明であること、巻末に某君の蛇足ともいうべき「ノート」の二つに欠ける点のあることを惜しみたい。

（三笠書房刊、フールス判　二一三ページ・定価一三〇〇円）（安川茂雄）

◇

風見武秀著　ヒマラヤ（原色写真文庫）

風見さんが、一九六四年九月から一九六五年五月にかけて、ネパール・ヒマラヤの撮影旅行をされたときの写真をまとめて、この度講談社の原色写真文庫として上梓された。

さすがに風見さんの写真だけにどの写真もまことに素晴らしく、ネパールの山を歩いたことのあるものには、当時をまざまざと思いださせる様なものばかりである。特に印象にのこるのは巻頭に折込み頁とした横に長いポカラ風景のカラー写真である。前景のネパール人と水牛、背景の緑の林とアンナプルナ連峰。実によくムードがあらわれている。その他アマダブラム、マナスル等ヒマラヤ連峰の写真は申す迄もない。これだけ広範囲にわたりネパール・ヒマラヤの写真を集められる人は、風見さんの他にはそう何人もあるまいと思われる。それにしてもこれだけの量のカラー写真を僅か一ドルで買える日本人は幸せである。若しこの写真集が外国で出版されたならば、少なくともこの数倍の価格になるだろう。ただ欲をいえば、写真が小さすぎることである。そこで、本のサイズを縦横二倍にして四倍の大きさにして出版した場合、四倍の価格の一五〇〇円でできないものだろうか。

なお巻末には、写真撮影上の注意、カメラ、フィルム等についても説明されており大変に参考になる。それにしても一九五八年にジュガール・ヒマールで撮影した四葉の写真の色の悪いのが目につく。色彩フィルムが六～七年の間にこれだけ進歩したのだろうか。

尚この写真をみて、つくづく残念に思うことはネパール・ヒマラヤの山が登山禁止のため登れないことである。この写真集の中にみられるだけでも、日本隊が手がけてそのままになっている山が沢山みられる。ガウリサンカール、メンルンツェ、ローツェ・シャール、ピーク29、ガネッシュ・ヒマールII峰、チューレン・ヒマール。この写真集にはみられないが、カンジロバ、ダウラギリII峰、ヒムルン・ヒマール、ランタン・リルン、カンチェンジュンガ南峰、マカルー東南稜、トゥインス、ラシャール等手をつけてそのままになっている未踏峰が数多く残っている。早くネパール登山が解禁にならないものかとこの写真集をみてつくづく思った次第である。

昭和四十二年十月二十四日、講談社発行。一五〇ページ、カラー写真一〇八葉、白黒写真二葉、地図六枚、定価三六〇円。（Y・M）

◇

田淵行男写真集　☆山の時刻☆

晩の汽車で土樽へ行き、足拍子へ登ろうという計画は出発間際で急に取り止めになった。待ちにまった「山の時刻」が著者のサイン入りで送られてきたからだ。その写真の一枚一枚を眺めつ透かしつ私は恍惚として一晩を過してしまったのである。

田淵さんの写真にはきびしさがある。そして一筋とおったものがある。この美しい作品の裏にひそむものは田淵さんの作品に対するきびしい態度であり、私たちの心を打つものは田淵さんの四十年の長きにわたる山へのひたむきの精進なのである。

常念乗越に登られた回数などもうとうの昔に百は越えているし、たった一枚の写真のために、吹雪の山中に十日間もたてこもってたいへんな苦労をしておられるのだ。

私はこの夏初めて白馬の頂上で田淵さんにお会いした。それはまったく予期しなかったことで、私はこの偶然をよろこんだのであった。しかし考えてみれば北アルプスはいわば田淵さんの庭みたいなものであり、一年のうち相当な日数をこのあたりで過ごされる田淵さんのことゆえ、私の方から北アルプスへ出かけさえすれば、田淵さんにお目にかかれる確率はかなり高いはずだったと言えよう。

陽に焼けた顔に、淡い茶色のサングラスの田淵さんは、写真を見て想像していたより小柄な方であった。一見して年代物と思えるような光る鏡胴のレンズをとりつけたリトレックは、これまた貫録のある三脚の上に鎮座ましましている。感動的な数々の作品はこのカメラから生み出されるのだ、と思った。モノクロ、カラー、赤外と何度もフィルムパックを交換しておられた。

普通一般の本と違って写真集では印刷の出来具合ということは著者の大いに気を使うところであろう。

昨年田淵さんは「北ア展望」というモノクロだけの写真集を出版された。白馬でのお話では、この写真の印刷の調子には著者としてまずまず満足だそうである。このようなグラビア印刷では、ハイライトのさえとシャドウのディテイルが問題となる由であった。

今度の「山の時刻」には八十三枚のグラビア写真のうちカラーが三十枚入っているが、著者はこのカラー印刷の結果にどの程度満足しておられるであろうか。カラー写真ではまずラボにおける原板の現像と、次に印刷所における印刷の二重の関門を経なければならないわけである。

「山上名月」と題する見事なカラー私はここにカラー写真の真面目を見る。暗くひろがる一面の雲海の上に浮かび出た満月の色。私も田淵さんと一緒に常念乗越にたたずんで山の美しさに酔いしれるのである。

山の一日の表情を見事に描いた「山の時刻」は田淵さんの十一冊目の本である。私は十二冊目が待ち遠しい。

A4変型、写真のほかに解説と随想が六十五頁、昭和四十二年十月三十日、朝日新聞社発行二千八百円。

（五八七三）

松崎中正

『踏　跡』第三号
―防大ローガン峰　登山特集―

「踏跡」は防大山岳部の部報である。その第三号が、一九六五年に同校山岳部員によって行なわれたローガン山の「独立山稜」経由による登頂の正式報告書となった。(四〇頁のタイプ印刷による略報が前に発行されているそうである。)

日本国土の防衛という重責を担っている防衛軍の幹部養成を目的とする(と私には思われる)こうした学校の学生が、海外へ登山のために出かけるということに対して私はその可能性に、可なりの疑問をもっていた。それは恐らく私ばかりではなかったろう。どのような大義名分で、普通の学校の学生と同じように、アラスカ(ユーコン)くんだりまで遠征出来たかということに関しては誰でもが深い興味と関心をもっていたことと思う。

ということは、そういうことをやること自身には充分な意義が認められるのであるが、果して日本の他の部署に属する官僚や議員連中が、これに心からの賛意を表するかどうか、それが実は最初から心配だったのである。

しかしやったのである。而も実に立派にやって来たのである。だが、果せるかなこの報告書の中の朝井さんや元島さん、川上氏らの文章を読むことによって、「われわれは行きたいのであります」「では元気で行って来給え」という風に、簡単に出かけられたのでないことがよくわかる。

朝井さんの一般報告(A)には、部外者には解らない略語が所々に出てくるが、計画具体化までの内外に亘る働きかけの苦心が詳細に述べられている。

隊長の川上氏からも私はいろいろ聞いているが、元人事局長堀田政孝氏の悲愴な覚悟がなかったならば、この計画は到底陽の目を見ることがなかったろうと想像されるのである。それにしても、たとえ血の滲むような努力はあったとしても、関係方面に多くの理解者と協力者を得たことは、何よりの幸いであったといわなければならない。

あとの方に又、堀田さんや久保田さんの思い出の記が載っているがそれらを読むに及んで私は、堀田さんの温い心と、川上氏の熱とねばりの強さに頭が下がると同時に、流石鈍感の私の眼頭までが熱くなるのを覚えた。

堀田さんは「一途に一つのことを念じ続ける気迫は、どんな人をも圧倒する。私はトウトウ川上ベースにまきこまれてしまった。何時の間にか、この計画は防衛庁のために、そして自衛官が世界に気を吐くために、是非やり遂げねばならないことであるように思いはじめた。」と述懐しておられる。まことに、"Where there is a Will, there is a Way"であることをマザマザと感じさせられたことであった。

外国では英国や米国は言うまでもなく、インドやパキスタンその他の国々でも旺んに軍人登山が行なわれているし、海外遠征も度々企てられ立派な業績が残されているというのに、日本だけが難しい顔をしてそういうことの実現に横槍を入れるといういわれはないのである。こういうことが簡単にいかないということは、やはり日本に深く根をおろした封建性の残滓と、後進性のシコリが未だに拭いきれずにいるということの有力な証左と言えよう。

しかし日本の自衛官がその通弊を打破して、二ヵ月以上も本土を離れて登山の旅に出たということは、立派であると同時に、われわれにとっては非常に愉快な出来ごとであった。

× × ×

気象、生理等に関する事項も、蒐集された資料をよく整理して完璧に近いものが出来上っているようである。こういうものはどんな登山隊でもやる必要のあることなのだが、多くは尻切れトンボで終っている。それをここまでキチンとやっているのはえらい。

川上氏の事前調査も詳細に亘り立派である。隊長の責任をわきまえてよく勉強している。他の隊長のもって範とすべきものであろう。

最後に、将来の計画と目される南極関係の記事が、鳥居鉄也氏並びに防大OBの糟谷洋治氏の手によって書かれているが、もうそろそろ次の目標のPRを始めているのかも知れない。

(吉沢一郎)

昭和42年6月30日発行、非売品、写真六頁、地図三葉、図表多数、一三〇頁。防衛大学校校友会山岳部・防衛大学校山岳部、編集責任者・元島英海、印刷所、文祥堂。

(HK・追記) 前号で雁部君がIris TrübswetterをHKにおける婦人の最高記録保持者と記しているが、(私もそう思っていた)最近の詳報で、同年九月一日、仏のIsabelle AgrestiがHenri と Noshaq West (7401 m)に登っていることがわかった。但しこれは初登ではない。(I・Y)

図書室便り
図書受入報告(42・8～9)
―記載洩れにつき追加―

○実業之日本社寄贈
(1)やどりぎクラブ編『槍穂高連峰』(ブルーガイド84)(昭42・8刊)
(2)飯田浩著『渓流釣りの旅』(ブルーガイド86)(昭42・8刊)

○あかね書房寄贈
(1)ノートン著・山崎安治訳『エヴェレストへの闘い』(ヒマラヤ名著全集3)(昭42・8)

○講談社寄贈
山田圭一・佐貫亦男著『アルプス』(原色写真文庫)(昭42・9)

○東京中日新聞出版局より深田久弥理事の口添えで次の五冊をご寄贈いただきました。
(1)諏訪多栄蔵・跡部昌三・高須茂監修『岳人講座一』(冬山)(42・2)
(2)同『岳人講座二』(春山)(41・9)
(3)同『岳人講座三』(夏山)(42・6)
(4)同『岳人講座四』(秋山)(41・10)
(5)高須茂著『登山談義』(38・10)

○明治大学炉辺会寄贈
『登頂ゴジュンバ・カン』茗溪堂刊(42・9)

○津田正夫氏寄贈
Eric Shipton著『Land of Tempest』(1963)

○Charles Fahs 氏寄贈
John D. McCallum著『Everest Diary』(1966)

○松方三郎氏寄贈
Wilfrid Noyce著『The Alps』(1963)

○栗林一路氏寄贈
(1)栗林一路著『アラスカの山に挑む』雪華社刊(昭42・5)
(2)栗林一路著『登山の手帖』(現代教養文庫247)社会思想社刊(昭40・9)
(3)栗林一路著『若いアルピニストの眼』徳間書店刊(昭36・7)

○山本朋三郎氏寄贈
(1)山本朋三郎著『南アルプス南部』(ブルーガイド52)実業之日本社刊(昭41・6)
(2)山本朋三郎著『南アルプス』(アルパインガイド33)山と溪谷社刊(昭39・4)

〔部報・会報〕
(1)『東海支部報』第一号
(2)『八幡製鉄所山岳部部報』No. 21(37.4～41.3)
(3)『札幌山岳倶楽部部報』No. 78～79(41.12～42.10)
(4)『北大山岳部部報』十号
(5)『リュッサック』十一号(1942～1965)(昭42・7刊)
(6)『あしなか』一〇五輯
(7)『OMCレポート』No. 214(42.9)
(8)『京都山岳』(42.9)
(9)『国立公園』No. 213～14(42.8～9)
(10)『山書月報』No. 55(42.8)No. 57(42.10)
(11)『山嶺』No. 449～50(42.9～10)
(12)『兵庫山岳』No. 3～4(42.8～9)
(13)『自然保護』No. 66～67(42.8～9)
(14)『山毛欅林』No.　(42.6)
(15)『山と雪』No. 112～13(42.8～9)

〔山岳雑誌〕
(1)『アルプ』No. 114～15(42.8～9)

(2)『岳人』No. 239～41(42.8～9,増刊号)
(3)『ハイカー』No. 143 (42.9)
4『山と渓谷』No. 346 (42.9)
(5)『Ski '68』第一集 (42.10) (実業之日本社)

【目 録】

(1)国立国会図書館『逐次刊行物目録』(昭和40年版)
(2)山里寿男氏寄贈『山里寿男画集』(展覧会出品目録(昭42・8)

○バックナンバー欠号の補充につき、次の四会(部)からご協力をいただきました。

(1)**奥多摩山岳会**『OMCレポート』(38.4～12, 39.1～3, 40.5～6, 41.1)
(2)**山村民俗の会**『あしなか』(九拾輯・九拾弐輯)
(3)**自然保護協会**『自然保護』(No. 1, 2, 4, 43～45
(4)**青山学院大学山岳部**(AAC)(No. VII, IX)(尚、No. I, II がまだ揃いませんのでO・Bの方の御協力をお願いします)

○吉阪隆正著『原始境から文明境』相模書房刊(昭38)が行方不明となっておりましたが、このほど**吉阪隆正氏**から更めて御寄贈いただきました。

Journal received in Aug.～Sept. 1967

1. Alpinismus : Jahrgang 5, No. 6～8 (Juni～August 1967)
2. Appalachia : Vol. XXXI, No. 2 (Dec. 1965) Vol. XXXIII, No.7 (June 1967)
3. Appalachia Bulletin : Vol. 38, No. 8 August 1967)
4. Der Bergsteiger : Jahrgang 34, Heft 6～7 (Juni～July 1967)
5. La Montagne : Année 91, No. 52 (April 1965) Année 92, No. 60 (Déc. 1966) Année 93, No. 61 (Février 1967)
6. Harvard Mountaineering : No. 19 May 1967)
7. Mountaineering : Vol. V, No. 1 (Spring 1967)
8. Österreichische Alpenzeitung : Jahrgang 85, Folge 1353 (Mai/Juni 1967)
9. Rivista Mensile : Vol. 88 Nr. 3～5 (Marzo～Maggio 1967)
10. Sierra Club Bulletin : Vol. 25, No.6 (July 1967)
11. The American Alpine Journal : Vol. 15, No. 2, 1967
12. till fälls : Årgang 38, 1966

◇寄贈図書受入報告(42・11)

図書の充実を計り、皆様にご寄贈を依頼致しておりますが、今月も多大のご協力を戴きましたこと、厚くお礼申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

横山厚夫氏寄贈
(1)横山厚夫著『登山読本』昭42・7 山と渓谷社刊
(2)横山厚夫著『切手＝世界の山めぐり』(山渓文庫37)昭42・7 山と渓谷社刊

山と渓谷社寄贈
(1)横山厚夫著『登山読本』昭42・7
(2)内田良平著『アルプス縦断35日』昭40・7
(3)吉尾弘著『垂直に挑む男』昭39・5

池田書店寄贈
(1)碓井徳蔵著『夏山入門』(実用新書28)昭35・4
(2)碓井徳蔵著『登山用具入門』(実用新書32)昭・1

筑摩書房寄贈
(筑摩書房編集部編『現代世界ノンフィクション全集』)
①『中央アジア探検記・白ナイル・シベリアの密林を行く』昭41・6
③『南緯90度・浮かぶ氷島T－3・世界最悪の旅』昭42・3
⑦『ゴビ砂漠探検記・世界の屋根を越えて・ベドウィンの道』昭41・12
⑲『森の猟人ピグミー・極北の放浪者・カラハリの失われた世界』昭41・9
⑯『コン・ティキ号探検記・チグリス騎馬号・恐竜を求めて』昭42・5
㉑『アイガー北壁の初登攀・エヴェレスト・ジャヌーへのたたかい』昭41・8

東京創元新社寄贈
(諏訪多栄蔵・山崎安治・安川茂雄・山口耀久編『現代登山全集』全10巻のうち第7巻を除く計9冊を山口耀久氏を通じてご寄贈戴きました)
①『日本の山と人』昭40・9
②『槍・穂高・上高地』昭42・11
③『剣・立山・黒部』昭42・8
④『白馬・不帰・鹿島槍』昭42・2
⑤『北岳・甲斐駒・赤石』昭40・7
⑥『八ガ岳』昭39・8
⑧『富士・丹沢・三ツ峠』昭42・2
⑨『山の危険・山の遭難』昭42・10
⑩『登山の基礎と技術』昭42・7

春秋社寄贈
(1)河口正著『河口慧海』昭36・7

京都大学学士山岳会寄贈
(1)『ノシャック登頂』昭36・7朝日新聞社刊

未来社寄贈
①菅野新一著『山村に生きる人々』昭36・4
(2)松山義雄著『山国の神と人』昭36・11

大和書房寄贈
(1)串田孫一著作集〈1〉『山』昭42・10
(2) 〃 〈2〉『博物誌』昭42・11

吉川弘文館寄贈
(1)吉田武三著,松浦武四郎『昭42・7

紀伊国屋書店寄贈
(1)神山恵三著『気象と人間』(紀伊国屋新書C－5)昭42・2
(2)山室静著『アイスランド』(紀伊国屋新書D－2)昭38・10

講談社寄贈
(1)風見武秀著『ヒマラヤ』(現色写真文庫)昭42・2
(2)佐貫亦男・山田圭一著『アルプス』(現色写真文庫)昭42・9
(3)田村宏明著『わが青春はヒマラヤの頂』昭40・8

同友館寄贈
(1)宮本常一著『私の日本地図①＝天竜川に沿って＝昭42・2
(2)宮本常一著『私の日本地図②＝上高地付近＝』昭42・6
(3)神奈川県観光協会編『ハイキング56コース』昭41・9

家の光協会寄贈
(1)清水大典著『山菜全科』昭43・1
(2)谷川浩著『石を求めて六万キロ』昭38・3

日本経済新聞社寄贈
(1)日本経済新聞社編『山小屋のぬし』昭35・6

日本文教出版社寄贈
(1)岡山県明るい県民運動推進協議会編『岡山ハイク』昭42・9

保育社寄贈
(カラーブックス)
①川喜田二郎著『ヒマラヤ』昭37・4
②渡辺公平著『北アルプス』昭14・12
③武田久吉著『高山植物』昭42・4
④安斉秀夫著『信州の高原』昭41・7
⑤布施正道『上高地』昭41・6

集英社寄贈
(1)ガストン・レビュファ著 近藤等訳『世界の山』昭41・8

読売新聞社寄贈
(1)三角寛著『山窩物語』昭14・3
(2)吉田利雄著『空から見た日本列島』昭41・2

社会保険倶楽部寄贈
(1)児玉政介著『山を楽しむ』昭40・6

新潮社寄贈
(1)小山義治著『穂高を愛して二十年』昭36・8
(2)新田次郎著『アルプスの谷アルプスの村』昭39・7
(3)戸川幸夫著『知床半島』(野性への旅I)昭38・12
(4)戸川幸夫著『マタギ』(野性への旅II)昭42・8
(5)戸川幸夫著『下北と都井』(野性への旅III)昭38・12
(6)戸川幸夫著『マタウンバ』(野性への旅IV)昭39・11
(7)戸川幸夫著『原始の島』(野性への旅V)昭41・1

≪バック・ナンバー欠号の寄贈≫

〔部報・会報〕

松田雄一氏寄贈
(1)『登高行 XV 1957』昭32・3
(2)『RCC報告 III 1929』昭4・11
(3)『関西学生山岳連盟報告 第1号』(1931)
(4)『 〃 第三号』(1932)

大阪山の会寄贈
『OAC』No. 15～21(昭41～42)

佐原志高会寄贈
『志高』Vol. 19(1966 Summer)
『一九六四年八月の記録』
『一九六五年七～十月の記録』

〔雑誌〕

山と渓谷社寄贈
『山と渓谷』 318 (1964. 10)
324 (1965. 12)
327 (1966. 3)
328 (1966. 4)

■海外山岳雑誌紹介■

松田雄一

The Alpine Journal Vol. LXXII. May 1967. No. 314

充実した内容のアルパイン・ジャーナルは、いつも楽しみである。編集は引つづきA・D・M・コックス氏。

巻頭はGerald Gruber博士による"A panorama of the Hindukush"オーストリー山岳会のJahrbuch des Österreichischen Alpenvereins, Band 91, Jahrgang 1966に発表された有名な写真と記事がHugh Merrickによって英訳され紹介されている。この写真については「山」二六六号六頁にも吉沢一郎氏により紹介されているが、多くの文献を上げての東部ヒンズークシュの山名高度の考証であるだけに参考になる。最近日本の登山界に注目されている地域だけに英訳されたことは有難い。他にこの号には一九六六年にアンジュマンの谷へ入ったケンブリッジ隊の記録がJourney to the Blue Valleyと題して収録されている。

アンデスの記録としては一九六六年のアルバマヨ登頂記がJohn Amattによってまとめられているが、同隊の写真中には日本のものと全く同じカマボコ型のテントがみられる。文中にサンタクルス・ノルテについてespecial interestがある様にかいているので、長野岳連隊による初登頂を聞いて残念に思っていることだろう。

グリーンランドについては、例のマイク・バンクス隊の記録がThe Royal Naval East Greenland Exp. 1966 (Part 1)がみられるが地図上で最近の各国隊の活躍した地域が描かれており参考になる。日本隊が最北の地域へ行っているのは先制した感がありたのもしい。この他に一九六六年にSöndreström Fjordに入った記録がThe Sandhurst Greenland Expedition 1966と題してJ.D.C. Peacockによりまとめられている。

会長のEric ShiptonはSome Reflections on Modern Climbing; A Visit to Alaskaと題し二つの記事を寄稿している。

研究論文としてはAndré RockがHow to estimate Avalanche Dangerと題して、前回についで登山の実際面での雪崩の問題について論じている。他にBasil GoodfellowはWide Base Stereoscopic Photographyと題し、立体写真が役に立つことをのべているが、この点については、本会でも金坂一郎氏が大分以前から提唱していることと同じである。

この他にも各種の記事がみられるが巻末にみられるCorrespondenceは見逃がす訳にはいかない。即ち一九四〜一九五頁にみられる会員Douglas Busk氏からエディター宛の書信である。

即ち前号に掲載された山崎安治氏のThe Modern Mountaineering in Japanの記事の中にPrince Chichibuの名がみられなかったのは大変残念である。殿下の死についてはA・J五十九年の86頁に記録されてはいるけれども、本会の名誉会員であられた秩父宮殿下の訃報(obituary notice)が掲載されなかったことは一層残念なことである。という書き出しで殿下のA・Cにおける業績と人柄についてのべられている。さすがにアルパイン・クラブであるとすっかり恐れいった次第である。因みにバスク氏について調べてみると、同氏は外務省に籍をおく外交官で、一九四一年に外交官として来日された訳である。A・Cへの入会は一九二七年、一九四九年よりCommittee Memberをつとめている。

なおこの書信は、遠い英国にも殿下の熱烈なファンがおられることを紹介する意味でも、全文を掲載した方がよいと考え、ここに紹介する次第である。

なお、このままでは著者の山崎氏が殿下のことを書きもらしている様に思われるので、同氏のために一言釈明しておきたい。

原文にはたしかに秩父宮殿下の記事があった。即ちA・J・71巻二五〇頁の一八行と一九行の間に「アルプスでも槇のアイガー登攀以後一九二六年の夏には秩父宮殿下(一九〇二〜一九五三、一九二八年五月A・C名誉会員)一行がマッターホルンをはじめ、シュレックホルン、ヴェッターホルン等十数峰に登り、槇、松方三郎は再度アイガーのミッテレギー・グラートをトレースし、一九二八年八月には浦松佐美太郎がヴェッターホルン西山稜を初登攀した」という文章がたしかにありましたが、本原稿は正確を期するために数人の人が原稿に目を通しましたので、その過程で、中屋健一氏の翻訳以前に右の文章が省略されておりました。原著者のために敢えて付け加えさせて頂きます。

× × ×

Chilbolton.
December 9, 1966.

The Editor,
The *Alpine Journal*.

DEAR SIR,

I am sorry that the author of the article on Japanese Mountaineering in the last *Alpine Journal* did not mention the name of Prince Chichibu. It is even more regrettable that no obituary notice of our Honorary Member was ever published in the *A. J.*, though his death was recorded in *A. J.* 59. 86.

The Prince will be remembered by many members of the O.U.M.C. in 1926–7 and it is worth recording that he asked to be an ordinary rather than an honorary member of the O.U.M.C. He climbed considerably in the Alps (Sometimes with Yuko Maki), was an extremely active skier and a regular attendant at our meetings.

He was elected an Honorary Member of the A.C. in 1928 (*A. J.* 40. 179) and contributed an article on the Japanese Alps next year (*A. J.* 41. 8). When I was posted to Japan in 1941 I wrote to him. Within a week of our arrival the attack on Pearl Harbour took place and we were interned. I nevertheless received some clandestine messages from H.I.H. These were rather pathetic, because, as I learned on arrival in Tokyo, he was himself under a sort of house arrest, owing to his strong disapproval of the actions of the Japanese Government. We were never able to meet.

His membership of the Alpine Club ceased in 1941. He was immensely gratified to be re-elected in 1952 (*A. J.* 58. 406) but, alas, lived only a few months to enjoy the honour.

Brought up in all the aura of sanctity of the Japanese court, it was a considerable achievement for him to accustom himself to British informality, and the O.U.M.C. helped him much towards this. The effect endured, as was shown by his courageous stand in the early forties.

Yours truly,
DOUGLAS BUSK.

Mountaineering. Vol. V, No. 1, Spring 1967

英国登山協議会(B・M・C)のOfficial Journalである。B・M・Cは日本でいえば、日本山岳協会にあたる全国組織で、事務所はアルパイン・クラブにおいている。

巻頭のAnnual Reportにはこの組織の活動状況が記されているが、加盟団体は一九六六年に十一団体が新たに加盟し合計一四二団体になった。巻末にはこれらの団体の名簿がでているが、この名簿をみて気がつくことは、A・Cという名称を日本の様に乱用していないことである。アルパイン・クラブ以外はすべてM・C(Mountaineering Club) C・C・(Climbing Club)等の名称が使用され、自ずとA・CとM・Cが区別されていることがわかる。

又この名簿からわかることは「大学山岳部」と「一般のクラブ」のみで、日本の様に「高校の山岳部」や、「会社の山岳会」がないことである。登山

(次頁下段へ)

◇ルーム基金入金報告◇

事務局

11月1日～30日までのルーム基金募金の応募者は次の通りです。

申込件数　三七件
（追加五件を含む）
申込口数　二三三口
総申込件数　一二一九件
〃　口数　六六二六口

氏名	会員番号	入金額	現住地
浅井修	二六三三三	一	愛知
秋田しおみ	五九三〇	二	東京
阿達憲	四四〇七	三	東京
石原達夫	五六四六	三	東京
石鍋孝夫	五二八六	三	東京
伊藤牧夫	六三七七	一	東京
五十嵐高志	五三六一	追一	
		計二	新潟
臼田昌一	四六三六	三	東京
榎本豊松	一六八三	一	東京
大貫健作	五六四三	三	神奈川
大島堅造	一五五五	一〇	兵庫
岡埜徳之助	二七一	追一〇〇	
		計二〇〇	埼玉
川崎精雄	三〇四三	追二	
		計五	東京
小浜浩三	五三八一	三	神奈川
権藤太郎	二〇三七	一	福岡
重村伝平	四〇九五	追一	
		計二	福岡
清水聡子	六二五六	三	東京
白籏史郎	六〇六八	二	東京
末松大助	三一一八	五	福岡
曾根原憲夫	五〇六五	三	東京
高橋長助	五八四一	一	山形
高橋忠太郎	五二八五	三	東京
竹内通雄	五三〇四	五	千葉
東京互斯体育文化会山岳部	三七九八	三	東京
徳長正	五〇五三	一	新潟
練木允雄	五二九九	五	東京
橋本克彦	六二七一	一	東京
室賀輝男	三九二五	三	新潟
元井芳正	六〇九〇	一	兵庫
山本健一郎	四八三六	三	神奈川
山口清秀	一一五一	三	東京
湯浅道男	六二一四	一	愛知
尹官炳	五五一七	三	東京
本会関係その他		追一・六	
日本山岳会越後支部		計一〇・三	
コロラド山岳会剰余金		九・一二五	
ルーム移転記念パーティ剰余金会員外		一七・五八	
長岡ハイキングクラブ		二〇	

尚、十一月の「山」に九月末現在の募金応募者の名簿を発表しましたが、その際、未入金者には※印を付しておきました。その後これら※印を付した方より十二月九日現在左記の通り入金がありましたので、御報告致します。

なお未入金の方は至急御入金下さいます様お願い致します。

氏名	会員番号	入金額	現住地
青木一隆	五四七五	一	栃木
石田稔郎	六〇六五	三	東京
笠井篤	五〇〇九	一	茨城
鎌野耀雄	五五二二	一	北海道
坂本矩祥	三六三九	一〇	東京
鈴木正規	四三三九	一	福井
関哲	五六七四	一	北海道
森下健次	六二八二	二	岡山

◇谷川岳遭難発生防止について◇

このたび群馬県知事より十月十九日付観第二九五号を以て、本会々長宛に最近集中的に遭難事故が発生している実情にかんがみ、別紙の通り各都道府県山岳連盟（協会）に対して要望がありましたから御承知の上、山岳団体等の指導について何分の御協力を賜わりたい旨依頼がありましたのでお知らせします。

× × ×

（写）観第二九五号
昭和42年10月19日

群馬県山岳遭難対策連絡協議会会長
群馬県知事　神田坤六

各都道府県山岳連盟
（協会）理事長　殿

谷川岳遭難事故発生防止について
（要望）

谷川岳遭難防止については、日頃格別の御協力をいただき感謝にたえません。

御承知のとおり本県は谷川岳遭難防止条例を制定し遭難防止につとめておりますが、依然遭難事故が絶えず、本年は既に十六名の死者を数えており、とくに最近では本月九日午後四時頃茨城県石岡山岳会員十名で入山、三パーティーを組み各コース毎に登はん中そのうちの一パーティーが一ノ倉沢で天候無視、不注意のため遭難するなど集中的に遭難事故が発生しております。

遭難の原因は天候無視（無謀登山）によるもの六件で最も多く、条例違反三件、不注意、技術の未熟によるもの各二件、不明三件となっており、登山者の不注意やリーダーの責任に帰する問題ばかりでなく、山岳団体のご指導を特にお願いする面も少なくないと考えられます。今年も谷川岳はこれから気候の激変期に入り、登山に際しては常に危険をともなうことが予測されますので、この際所属団体に対し会員の指導統制と谷川岳遭難防止条例の遵守についていっそう留意するよう指導の徹底を期せられたく要望いたします。

≪辻村伊助氏の写真について≫

此の度千葉大学園芸学部助教授の高野一郎氏より、深田理事を通じて、辻村伊助氏御一家が関東大震災で遭難される直前に写された貴重な写真が寄贈されました。本会ではこの写真を佐藤久一朗評議員にお願いして、スイス日記の原稿を収めている箱に一緒におさめて保存することにいたしましたので御紹介致します。

尚この写真の入手経路について同氏にお尋ねしたところ、次の様な御返事をいただきましたので併せてお知らせします。

× × ×

拝復

辻村伊助氏御一家の写真を御送り致しました所、御丁寧な御礼状をいただき有難く御礼申上げます。

尚入手の経路を御尋ねなのでお知らせ致します。

私は松方様御存知の高野岩三郎の息子です。父が東京大学在勤中は、小田原で毎年夏を過すのが例になっておりました。辻村様の奥様はスイス出身、私の母はミュンヘン出身でしたので大変親しくしておりました。当時辻村氏は小田原で農園を経営しておられたのです。関東大震災で辻村氏御一家が全滅された年は、私は小学校四年でしたが、その時は神戸に住んでおりました。今年四月二十日、母は八十三歳で老衰の結果死亡致しましたので、その遺品を整理しておりました所、辻村氏御一家の写真がありました。之は日本山岳会に御送りするのが良かろうと思い未知の方ではありますが、深田久弥氏に御願いした訳であります。

先ずは御知らせ旁々御礼の御挨拶まで

十一月二十二日

高野一郎

松方三郎様

御侍史

学校や他の訓練機関が沢山あるので、若い人は、こうしたところで養成されているのかもしれない。

このことに関連してLord HuntがBritish Youth in the Mountainsと題して執筆しているが、これにはAn Article to the U.I.A.A. Bulletinとサブタイトルがついている。

専門委員会の報告にはB.M.C. Equipment Sub-Committee ReportとしてDr. L. J. Griffineが Pitonsをテーマにとりあげているが、その結論として推奨しているピトンは、かつて金坂氏がKS型ハーケンとして考察したものと同じ主旨のことをのべている。即ち Eye Position, Eye Size, Elliptical Eye, Shoulder の四点を上げて良否を説明しているがこの点はすべてKS型ハーケンが満している。

Expedition Reports には West Greenland のUpernivik島へ一九六七年に遠征した The University of St. Andrews 隊の記録がみられる。

Österreichische Alpenzeitung Folge 1352～1353. 1967

オーストリー山岳会の機関誌アルペンファイトゥングの一三五二号（三～四月号）には巻頭に Grand Teton の記事がみられるほか、A. Diemberger がVon den Bergen der Welt, Himalaya 1965. und 1966 と題して地域別に記録をまとめている。

一三五三号（五～六月号）にはこれの続きとして、同じ著者によりHindukush 1966がまとめられているが、さすがにディーンベルガーはヒンズークシュには詳しい。

その他例によって書評、図書紹介が多数とりあげられている。

× × ×

× × ×

愛知県大学山岳連盟 映画会報告

昭和三八年の冬、愛知大学山岳部薬師岳遭難を契機に発足した愛知県大学山岳連盟は、本年で満四歳を数えることになった。この間表面だった活動は、何もなされて居らず、低迷状態を続けていたが、学生諸君の強い自意識によって活発化への機運が盛り上ってきた。

丁度これと時を同じくして東海支部にも、映画会の計画があったが、学生の映画会に関する協力申し入れをうけいれ主催、大学山岳連盟、後援、東海支部、毎日新聞として全国的に支援することになった。

十一月十八日（土）午後六時から名古屋中小企業センターホールで映画は「マナスルに立つ」「キンヤンキッシュ」の二本を用意し、講師には、関西支部より、今西寿雄氏をお招きして開演された。

遭難対策基金募集「映画と講演の夕べ」のタイトルでもって行なわれたが、大成功のうちに無事終了できたことは何ごとにも替えがたい。

この催での収益は、当座プールしておき、主旨に基すき有用に使用することになった。

これを機に益々学生との緊密化を計る所存であるが、是非会員諸氏の好意ある御援助を期待するものである。

映画会に際し種々御協力下さった松田、関口両氏、毎日新聞社、松竹映配、東大山岳部殿には誌上をお借りして厚く御礼申し上げる次第である。

（東海支部　尾上　昇記）

国際山岳協会連合（UIAA）加盟承認について

「山」二六八号に加盟についての経緯を報告いたしましたが、その後十月一七日付、U・I・A・A会長　ウィス・デュナン博士より、「一九六七年十月八日のU・I・A・Aの総会において、日本山岳会の加盟は正式に承認された」旨の通知がありました。

‖学生部報告‖

（一）関西学生山岳連盟訪問

十一月十一日より三日間、神戸・三の宮・霊声寺に於いて関西学生山岳連盟（AAVK）のリーダー・トレーニングが開催され、全体会議の議題の一つとして日本学生山岳連盟の件がとりあげられる旨連絡を受けましたので、本会学生部より帰山、三浦の二名がこれに参加し、設立趣旨等を中心にAAVKの各校と親しく話し合う機会を得ました。

この全体会議に於いては、最終的結論は得られませんでしたが、AAVK内で討議のうえこれを総会にかけてAAVKとしての態度を決定する事となり、学生部では大きな期待を寄せております。

（二）山の映画と音楽の夕べ

学生部年報発行資金及び不足分運営費の調達を目的とした「山の映画と音楽の夕べ」が、十一月十四日、千代田区公会堂に於いて開催されました。午後五時半の開場後、絶えることのない客足に、不安を抱いていた委員一同ホッと胸を撫でおろしました。一般受けを考えて出演を依頼した学習院大学ギターアンサンブルも映画も、ともに評判良く、ほぼ定員いっぱいの入場者を迎え盛会のうちに幕を閉じました。十二月一日現在、未回収の券が三百枚近くありますが、純益は十万円を越すことは確実であり年報発行のメドもつきましたので、御報告致します。この映画会開催にあたり、御協力いただきました皆様に紙上より厚く御礼申しあげます。

（三）マラソン大会

学生部恒例のマラソン大会は、十二月三日昨年と同じ桜田門を起点とする皇居一周コースで開かれました。天候にめぐまれ、日曜日とあって混雑も少なく、競技はスムースに運んで楽しい一日を過すことができました。

リレー・優勝・早稲田大学
準優勝・駒沢大学
個人・優勝・吉沢君（上智大学）
準優勝・寺田君（専修大学）

（文責・帰山）

ガブラル谷奥より見たブニ・ゾム山塊（望遠）京都教育大学隊提供

会員通信追補

インド

五八八九　花井俊彦

この度、愛知教育大学の東南アジア教育・産業開発調査隊員として、学術調査のため、二ヵ月間の予定で、インド（カシミール、アッサム）、ネパールのヒマラヤ山麓地帯の調査をすることになり、十二月七日羽田を出発いたします。今回は山登りとは関係ありませんが、ネパール外務省へは、登山開禁の関心がありますので、行く予定です。留守中は何かと御迷惑をおかけすることが多いかと思いますが、よろしくお願い致します。

絵画の寄贈

この度会員高遠宏氏（会員番号五五三二）より、ルーム移転記念パーテーを祝して北岳の版画が寄贈になりました。

本会では図書室に掲げることにしました。厚く御礼申上げます。

熊本支部秋季例会報告

期　日　昭和42年11月4日～5日
例会地　熊本県内大臣溪谷
参加者　奥野、西沢、馬場、本田、仁尾、
会員外　四人（以上九人）

十一月四日　晴のち薄曇　午後一時半と二時に分れて仁尾、本田両君の自家用車で熊本を出発した。内大臣溪谷の広河原に着いたのは先発組が午後三時半であった。直ちに幕営の準備に入った。

内大臣溪谷の紅葉は麓が丁度盛りであった。以前は谷に入るには長いトロ道を一つ一つ枕木を伝って歩いていたのが、今は車道が通じて谷を登り、県境の椎矢峠を越えて宮崎県椎葉に通じている。秋季例会は会員の要望があり、この溪谷でキャンプして背稜山脈中最高の国見岳に登山することになった。一、五〇〇mから一、七〇〇mの山々に囲まれたこの溪谷の最奥の谷間の夜は、さすがに肌寒さをおぼえた。午後九時過ぎまでファイヤーを楽しんだ。その頃は星空であったが、夜半から天気が崩れて翌五日は早朝から雨となった。幸い朝食を終えて、テント撤収後であったのでよかったものの、雨は止みそうになかったので、国見岳登山は中止した。

このまま帰るのも残念であり、営林署事業所から約二〇〇m登ったところにある小松神社まで登り、来年秋再び国見岳登山を行なうことを申合せ、午前十一時熊本に向け帰途についた。

アメリカ山岳会へのメッセージ

I.Y.

ニック・クリンチが去年の12月2日に、AACの会長に選ばれる予定なので、お互いの友人であるクリンチのために、何かメッセージを送れとファークハール老から手紙が来たことは、前号の編集後記に一寸書いておいたが、私はその言葉に甘えて次のような我流の挨拶文を送った。これは飽くまでも私的なもので、礼を失する部分があったら直して頂きたいと付け加えておいたので、実際に読まれたものはもっと違ったものになっているかも知れない。

× × ×

Ladies and Gentlemen,

Happiest news reached here from Mr. Francis P. Farquhar, my respectable and senior friend, who entertained me heartily when I had been on the way to the Andes and back home in 1961.

Mr. Farquhar says in the latest letter to me that our mutual friend, the Nick, Mr. Nicolas B. Clinch, might be elected the President of the American Alpine Club on the occasion of the Annual Meeting of this year which

(continued to the next page)

◆マイク・ライアンの印象◆

—福岡の岳人との交歓—

新貝　勲

先日、ニュージーランドのマラソン選手マイク・ライアンにあった。九州ハカタで開かれた第二回国際マラソン選手権大会の三日前の夜。朝日新聞社から「すぐきてくれ。ライアンがあいたがっている」と電話があった。指定されたデートの場所は、福岡大山岳部コーチの植松満男君が今春開店した山の店「エーデルワイス」。もうライアンを囲んで植松君らがワイワイやっているところであった。

初対面のような感じがしなかった。昨年暮れ、わたくしはクック山に登山中「ライアンが福岡での第一回国際マラソンで優勝」と報ずるラジオを聞いた。さらに二ヵ月後、そのライアンがハカタから門田のアイゼンをみやげに持帰った、と知人から知らされ、山に登るマラソン選手というものに興味をそそられた。ライアンも「ボクの母国に登山にでかけた人たちにあってみたい」と当時話していたそうだ。

あれからちょうど一年目の対面「クックは楽しかったか」とまず、話しかけてきた。ニコニコ笑っている。白いハダがぽっと赤らみ、目もくりくりしていて、男でもほれぼれするような好青年。五年前まで英国に住んでいたというのに、英国人らしくない。実にほがらかで、人好きがするタイプ。すぐ仲良くなった。手には飛行機のなかで読んできたというハラーの「チベットの七年」。お気入りで、これを読むのも三回目だそうだ。

まず、彼が自己紹介。

スコットランド生れ。兄がロッククライマーだったので、十四歳のときから兄と組んでスコットランドの岩場で遊んだ。冬も登った。働いていた炭鉱がつぶれ、ニュージーランドに移住したが、その前にノルウェーの山もずいぶん登った。あのころは楽しかった。

話は用具、遭難、ヒマラヤ、山の本などあちこちに飛んだが、印象に残ったのは「メキシコ五輪が終ったら、登山をもっと真剣にやる」という言葉。彼によると、マラソンは競技としての魅力はあるが、山にはかなわない。自然、山の友情、未知への憧れ……マラソンでは味えない別の魅力があるそうだ。植松君からアイゼンをもらってご気嫌の彼は「いつかヒマラヤをやりましょう」といいながらホテルへ帰っていった。

三日後、アベベをしのぐハイペースで豪州のクレイトンと先頭を突走るライアンの姿をみた。その表情は岩場で戦うクライマーのそれとそっくりだった。

翌日、福岡空港ロビーにライアンを見送ると、彼は「仲間です」と長身のマラソン選手を紹介した。スコット・ハミルトン。オックスフォード大学山岳部のハラモシュ（カラコルム）遠征隊のメンバーだったのにはびっくりした。米軍アラスカ基地にいた関係で明大、早大登山隊に知人もいるらしい、ここでも又山の話に花が咲いた。

世界新の出たレースよりも、僅か七人の外人選手中、二人までも山男がいた、という事実に驚ろくと同時に、ちょっと誇りにも似た気持を味わった。

(continued from p. 19)

is to be held at Berkeley on the second of December, 1967.

I have the honour to send my highest and heartiest congratulations to him and all the members of the American Alpine Club. I think he might be one of the youngest presidents of the leading alpine clubs of the world, having the most splendid mountaineering careers and promising future activities.

He has many mountaineering friends in Japan and I think there are no mountaineers and explorers in our country who do not know his name and his wonderful abilities to organize expeditions and splendid climbing powers.

I am very proud to have him as a mountaineering friend of mine. He has been showing us very and bottomless kindnesses whenever he was busy and occupied with his businesses.

Thanks to his precious and adequate advices, many Japanese expeditions to the Andes and other parts of the highest mountains in the world, have had the successful results including my one to the Cordillera Blanca and Apolobamba in 1961.

He is always very kind and sympathetic to us but sometimes he showed me his one side of headstrongness. In 1961 he took me to the Yosemite Valley and passed a night in a lodge in front of the Hotel. There he was coughing at times and had a fit of sneezing. I said to him. "Did you catch cold? "He replied. "Nothing. Don't care of me." He refused my spare jacket and sneezed again. I believe you had better take care of his geyser-like obstinacy.

Some days ago, he wrote me informing that his wife, Betsy, is going to become a mother. I suggested him to christen the newly coming baby as "Vinson". I am sorry that I don't know what the result was.

Now I must go back to the formal.

Having elected President an able man such as Nick Clinch, the future of the American Alpine Club would be of the full brightest hopes and I think the relations between the American Alpine Club and the Japanese Alpine Club of which I am a councillor will be more closely connected and promote our friendships more and more deeply.

Thank you,

Ichiro Yoshizawa.

× × ×

右に対し、A・カーターから左記のような手紙が来た。嬉しかった。

Dear Mr. Yoshizawa,

I was delighted that your excellent letter to Francis Farquhar was read to the entire membership of the American Alpine Club just after Nich Clinch was elected to the presidency of the American Alpine Club in Berkeley, California last Saturday. Everyone was very happy to hear your good words of good wishes.

Adams Carter.

常務理事会

▽日時　十一月二十八日六時三十分～
▽場所　本会ルーム
▽出席者　加藤、大塚、飯野、松田、丹部、宮下、成瀬
▽議事
(1)外国雑誌新規購読の件
一九六八年より Die Alpen, Geographical Journal の両誌を新規に購読することをきめる。
(2)会員名簿編集の件
十一月の理事・評議員会で、編集の方針がきめられたので、その線で早急に編集に着手する様、丹部理事に依頼した。
(3)年次晩餐会準備の件
司会の成瀬氏を交えて打合せを行なった。
(4)年末手当支給の件
(5)会員に関する内規検討の件
(6)十二月理事・評議員会議題検討の件
（以上）

十二月定例理事評議員会

▽日時　十二月七日六時四十五分〜
▽場所　本会会議室
▽出席者　三田副会長、理事—深田、辰沼、大塚、松田、宮下、丹部、竹田、広谷、長尾、酒井、関口、大貫、中島、評議員—藤井、佐藤、折井、石原、沼倉、川森。
（以下委任）松方会長、渡辺副会長、理事—加藤、飯野、評議員—島田、吉沢、望月、堀田、中屋、監事—牧野、松本。
▽議事
(1)ルーム基金募金の件
十一月中の募金額は37件、二三三口累計一二一九件、六六二六口、目標額に対し八二・八%であり、頭打ちの感がある。新聞社関係については松方会長がお願いに廻っているので近日中に決まる予定である。本件については、理事会の責任に於て、身近のもので未だ申込まれてない人に再度お願いしてみることにする。
(2)来年度役員候補者検討の件
本年の年度末を以て任期に達する役員は、正・副会長（二年任期）、理事（一年任期）の全員と評議員（三年任期）一名（折井）、監事（二年任期）一名（松本）であることを、確認すると同時に、理事会の構成、評議員会の構成について意見を交換した。
なお評議員については、四月の臨時評議員会で六〜七名ずつ毎年交替する制度について検討したこともあるので、この点については、再確認するための臨時評議員会を開き検討することを決める。
(3)その他報告事項
①秩父宮スポーツ博物館出品の件
寄贈にすべきか、貸出にすべきかについて検討したが、受入態勢が充分でない様子なので、本件は貸出にする方針とし、具体的には常務理事会に一任することに決定。
②山日記　……大貫・松田
昭和43年度版の刊行は予定よりおくれ十二月一日に発行した。これに関連し本会の負担で贈呈する山日記は、役員、評議員、支部長、名誉会員のみとし、他は茗溪堂の負担で贈呈することを決める。
③山岳62年号　……中島・竹田
原稿がおくれたため、発行の時期は三月末日になる予定である。広告については未だ1/4程度しか集ってないので協力方が重ねて要望された。
④会報　……酒井
十二月四日に会報編集委員会を開き、発行日遅延の対策を検討し併せて年度内に三種認可をうけるべく、スケジュールを決定した。
⑤富士山登山技術講習会報告…広谷
十一月二三日〜二六日、予定通り、無事終了した。参加者50名、経費はバレーボール用ネットを三、四五〇円で購入した他は、すべて参加者からの会費でまかなった。　……広谷
⑥忘年会
婦人懇談会・集会委員会にて準備をすすめているが、出席者60〜70名を予定。尚バザーは都合により中止した。
⑦日印合同婦人登山隊の件……広谷
インド側とのコミュニケーションが悪いので、近く商用でインドへ行かれる会員竹田吉文氏に現地との交渉を依頼することにした。その際本会のクラブ・タイ四本を土産に持参することを承認した。尚これに関連し装備担当大塚理事より、同登山隊に対し、本会備品より、キャラバン用テント二張、高処用テント一張、固定ザイル二五〇メートル、その他雑品一式を貸出しすることにつき承認願いたい旨発言あり、本件承認した。
⑧年次晩餐会収支報告　……関口
出席申込者の中38名が無断で欠席したため、プリムラとの支払に三六、五〇〇円の赤字が生じた。この他に通信費、印刷費等、この晩餐会に会が負担した経費もあるので、これらを集計すると

収　入	三一〇、五〇〇円	
支　出	四一四、九六〇円	
差引不足	一〇四、四六〇円	

となり、年次晩餐会については抜本的に対策を講ずる必要がある。
とりあえず、この赤字分については、会の経費で負担することを承認するが、事情を会報紙上に公表し、無断欠席者に対し協力方お願いすることを申合せた。
尚今後は、出席通知を出していて欠席する場合には、当日の正午までに必らず何らかの方法で連絡して貰うことを徹底し、無断欠席者からは会費を徴収することを確認した。
⑨海外連絡
アメリカのヘルマン・H・ハンソン氏来日、会員津羽氏と十二月一日富士に登頂した。　……宮下
学生部報告　……長尾
⑩富士山診療所報告
（以上）

クリスチャン・ホスト逝く

Christian Jost (1894〜31. Juli, 1967) と言っても知る人ぞ知る、ということになりそうだが、雪崩や雪崩遭難救助に関心があり、関係のある人なら知っている筈の名前である。私も最近、C・フレイザー(Colin Fraser)の〝雪崩の謎〟(Avalanche Enigma)を読んで初めてその名を知った。スイスのダボスにある Parsenn-Rettungsdienst の創立者で、一九二七年〜一九六五年まで大体その会長の重責にあった。
（吉沢）

会務報告＝追補

三月下旬〜五月中旬にかけての会務報告が手違いにより左記の通り会報に掲載もれになっておりましたので、遅ればせながら掲載させていただくことにしました。大変古いもので時期を失した感がありますが、種々検討の結果会の記録として残す必要があるとの結論に達しましたので、あえて掲載することにしました。この点御了承の程お願い致します。
（松田）

臨時理事・評議員会

▽日時　三月二十三日（木）六時四十五分〜
▽場所　本会ルーム
▽出席者　三田副会長、理事—辰沼、村木、大塚、松田、飯野、宮下、竹内、広谷、竹田、小方、長尾、山口、住吉、評議員—藤井、村井、吉沢、佐藤、石原、高山、監事—松本、東京支部—沼倉委員
（以下委任）松方会長、理事—加藤、川崎、評議員—深田、望月、堀田、中屋、津田、中田、後藤、折井
▽議事
(1)通常会員総会開催の件
(2)東京支部の解散について、
松田理事より、解散に至る迄の経緯について説明があり、これに対し石原支部長より、旧東京支部で行ってきた諸事業を本部で継承して行って欲しい旨の要望があった。本件については、充分に考慮している旨の回答があった。なお、手続的にみて、東京支部の解散は、支部長会議にかける必要があるのではないかとの提案が藤井評議員よりなされたが、種々検討の結果、早急に各支部長宛に文書を以て連絡し、支部長の意見を求めることにした。
(3)来年度役員候補者推薦の件
理事については、常務理事会案を説明、諒承を得たので、本案を総会にかけることにしたが、評議員については決定をみず、会長に一任する。
監事は、野口氏の後任として前静岡支部長の牧野氏を推薦することに決定。
(4)昭和四十二年度事業計画案検討の件
原案通り承認する。
(5)ルーム移転の件
三月の理事・評議員会の決定にもとずき、ルーム移転のための各委員会の委員長および事務局担当を次の様にきめる。
①募金委員会
委員長……松方会長
事務局……加藤・飯野理事
②新ルーム改装委員会
委員長……深田評議員
事務局……松田・竹田理事
③ルーム移転実行委員会
委員長……大塚理事
事務局……宮下・関口理事
なお各委員会の委員は、委員長と事務局にて早急にきめることにする。
(6)其の他
①谷川岳遭難防止条例にもとずく登山届けの件。
東京支部解散に伴ない、代表者は松方会長になるが、代表者印の取扱いについては常務理事会に決定を一任する。
②入会申込書用紙の形式変更の件
個人および団体の二種類とし、誓約書を廃止し、事務処理欄をもうけることに決定。
③定款の要旨英訳の件
④信濃支部報告　……高山
⑤日山協指導員問題について
⑥会報広告料値上げの件（以上）

常務理事会

▽日時　四月三日、六・三〇〜
▽場所　本会ルーム

▽出席者　松方会長、辰沼、大塚、宮下、松田、
(1)総会開催準備の件
(2)谷川登山条例の件…代表者印を確認する。
(3)ルーム移転準備の件
(4)会報広告料値上げの件
今年度より会報の広告も山岳と同様、申込書による契約制を明確にし、広告料も値上げすることを決める。値上げの額については「山」二六五号15頁の会報広告についてのお願い参照。
(5)四月六日定例理事・評議員会提出議題について検討。

四月理事・評議員会

▽日時　四月六日(木)六時四十五分～
▽場所　本会ルーム
▽出席者　松方会長、理事―大塚、松田、飯野、竹田、竹内、小方、宮下、長尾、広谷、評議員―深田、藤井、村井、島田、中屋、堀田、石原、沼倉（以下委任）理事―山口、川崎、評議員―佐藤（久）、藤島、吉沢、折井、後藤、伊藤（秀）、高山、監事―松本
▽議事
(1)東京支部解散の件
東京支部解散趣意等の内容を検討。
(2)通常会員総会開催の件
議案内容について確認したが、会長に一任してあった評議員二名改選の件は、結論に達することができず、本日評議員の出席が少ないので四月八日に臨時在京評議員会を開いて決めることにする。
(3)ルーム移転準備の件
新ルーム改装委員会の委員を次の様にきめる。
委員長―深田久弥
委員―小林義正、松本熊次郎、牧野衛、佐藤久一朗、折井健一、加藤泰安、飯野亨、倉知敬、平山善吉、関口周也
事務局―松田雄一、竹田寛次、
新ルームは向井ビルに40坪を借りる方針で、四月末より募金開始、契約を完了、五月に改装（図書室、事務室、談話室、集会兼会議室）、六～七月に移転の予定で準備をすすめることにする。
(4)其の他
①谷川岳登山届の件
代表者印は新規につくり、指導担当理事のもとに保管する。
②会報広告料値上げの件
41年五月号（二六三号）より値上げすることにし（山二六五号15頁参照）代理者の場合の取扱いも明確にする。
③日本学生山岳連盟結成の件
④支部報告
山形、東海の各支部の報告が行われた。（以上）

在京評議員会

▽日時　四月八日　午前八時～
▽場所　国際文化会館
▽出席者　松方会長、吉沢、村井、藤井、島田、中屋、堀田、石原、沼倉。
▽議事
(1)改選評議員について検討。
村井評議員の後任に川森左智子氏、深田評議員の理事転出に伴う後任には沼倉寛二郎氏を推薦することを決める。
(2)評議員の改選について、
今後のこともあり、原則として1/3毎年交替を確認、昭和43年度から実施することにしてはどうかという点につき確認する。（以上）

常務理事会

▽日時　五月十日六・三〇～
▽場所　本会ルーム
▽出席者　辰沼、大塚、松田、宮下各常務理事
▽議事
(1)ルーム移転の件
外苑コーポの解約申込について
向井ビルの契約について
(2)レビュファー氏他歓迎会報告
余剰金一二、七〇〇円は雑収に計上（後、ルーム移転基金第一号に繰入）
(3)マイク・バンクス氏歓迎会報告
不足金四、〇〇〇円は会で負担することを承認。
(4)会費滞納による除籍予定者40名につき審議、中五名は除籍保留することにする。
(5)本会本年度運営方針検討の件
組織体ではできないようなことで、本会ならできるという様なことをやってみたい。
(6)今年度設置する委員会について検討する。
(7)役員の任務分担につき検討し常務理事会としての原案をまとめる。

在京評議員会兼ルーム移転募金常任委員会

▽日時　五月十九日午前八時～十時
▽場所　国際文化会館
▽出席者　松方会長、三田副会長、島田、神谷、佐藤、石原、藤井、沼倉、川森、西堀、辰沼、丹部、飯野、松田
▽議事
(1)評議員任期の件
来年度は地方在住評議員八名の中の四名、在京評議員十二名の中六名が交替することを確認。
(2)募金の具体的方法につき検討(以上)

三月・海外連絡委員会

▽日時　三月三十一日六時三十分
▽場所　本会ルーム
▽出席者　深田、吉沢、神原、芳野、松田、近藤、牧野、関口
▽議事
(1)マイク・バンクス氏来日の件
(2)レビュファー、ブンシャー、マライニ氏歓迎会開催の件。
四月二十四日、OAGハウスで開催することも決める。（担当関口、松田）
(3)コロラド山岳会登山隊来日の件
(4)シャモニー・アルピニスト集会の件
(5)海外登山技術研究会の件

四月・海外連絡委員会

▽日時　四月二十一日六・三〇～
▽場所　本会ルーム
▽出席者　三田、深田、吉沢、神原、倉知、松田、鈴木、関口、牧野
▽議事
(1)レビュファー、ブンシャー、マライニ氏歓迎会の件
(2)シャモニー、国際アルピニスト集会参加者、推薦の件
明大OBで、ゴジュンバカン登頂者の植村直己、伊藤頌司氏を推薦することを決定。

ルーム日誌（42年11月）

2日（木）定例理事評議員会
8日（水）二水懇談会、指導委員会
14日（火）アルネ・ネス氏歓迎会
15日（水）婦人懇談会「山水会」
16日（木）第八回登山技術講習会、準備会
17日（金）海外連絡委員会
20日（月）富士山登山技術講習会準備会
21日（火）新旧役員交歓会（於上野蓬莱閣）
22日（水）第二三九回小集会「ペルー・アンデス遠征報告会」
27日（月）婦人部日印合同登山打合会
28日（火）常務理事会
図書委員会（一本展打合せ）

編集後記

今日は42・12・31。前号では一校抜かしたのでミスやや多。次号に訂正表を出す予定。「山」を平均的に充実させる為には原稿を多数お送り願いたい。「山」を見て入会申込書を請求されてきた人達もいる。「山」は親睦の場であると同時に、JACのPR誌でもある。（吉沢）

昭和四十二年度
「山」編集委員の顔振れ

編集代表　吉沢一郎
　　松田雄一
　　宮下秀樹
　　小方全弘
　　竹内通雄
　　坂本矩祥
担当理事　酒井敏明

昭和四十三年一月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　吉沢一郎
頒価五十円　（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
印刷所　東京都港区赤坂一丁目三番六号　株式会社　技報堂

あなたのネガから　パネル張り
山岳写真を
ありし日の、苦斗と歓喜をいまここに

35mmからすばらしい迫力！

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。
ネガと返送料150円同封でご註文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。
代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。
なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。
但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちにご返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部
■全紙半分……パネル張り　¥ 1,200
■全紙（新聞1ページ大）……パネル張り　¥ 1,600
■全紙2倍……パネル張り　¥ 4,000
カラーの部（ネガ、カラーに限ります）
■四切……パネル張り　¥ 1,500
■半切……パネル張り　¥ 3,000
■全紙……パネル張り　¥ 5,000
上記以外のサイズ、または同時に多数のご註文の際はご照会下されば、別にお見積申し上げます。

優れた技術とハイセンスの
カタログ進呈
本多写真
本多善博
名古屋市熱田局区内柴田西町1―16　TEL（611）7047

山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店
登山用具専門店
プライスリスト進呈
山の店
大阪市北区曽根崎上1-24　TEL341―4192
山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店